

ISSN
0387-6268

徳島県博物館紀要

第19集

昭和62年度

徳島県博物館

ISSN
0387—6268

徳島県博物館紀要

第19集

昭和62年度

徳島県博物館

目 次

徳島県に分布する結晶片岩地域の地質

小川 祺 文……………1

海原古墳調査報告

岡山真知子・大塚一志……………25

徳島県に分布する結晶片岩地域の地質

剣山研究グループ* 小川 祺 文

1 はじめに

徳島県博物館では、昭和34年開館以来、徳島県の自然について調査研究をすすめ、標本の整備につとめてきた。

博物館活動の歴史をふり返ってみると、県内各地域を対象に行われた総合学術調査があり、結晶片岩地域では神山町、西祖谷山村、徳島市、剣山県民の森の調査・研究がある。

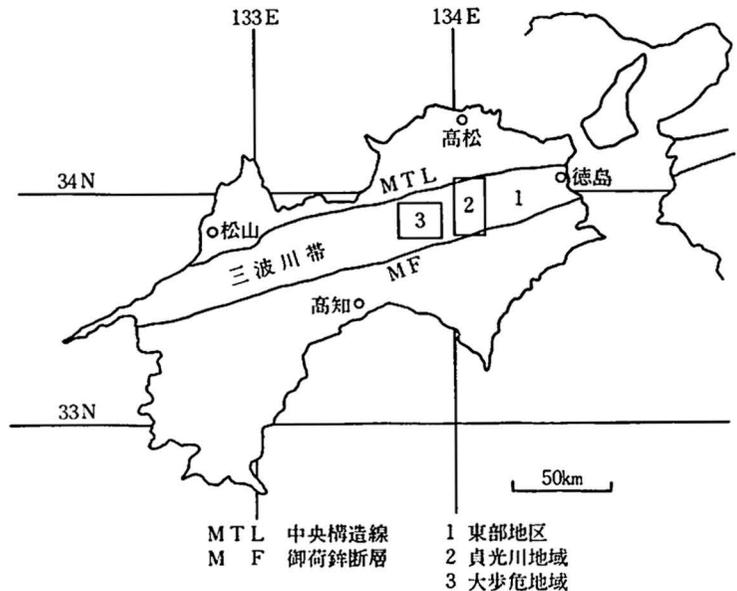
その成果は「阿波の自然」（徳島県博物同好会・徳島県博物館）「総合学術調査報告」（阿波学会・徳島県立図書館）に発表されている。

この中で、地質部門の調査研究は主として剣山研究グループのメンバーが中心となり、とりくんできたものである。

また、剣山研究グループは、長期にわたり徳島県に広く分布する変成岩地域の調査・研究をすすめてきた。

県内に分布する変成岩は、三波川結晶片岩で、古生代の石炭紀から二疊紀にかけて海底に堆積した堆積物や、海底に流出した溶岩や火山砕屑物が、比較的高い圧力と低い温度条件のもとで形成されたものと考えられている。

三波川結晶片岩の分布地域は、四国山脈の北側で、吉野川に沿って東西に走る中央構造線によって境されている。即ち、徳島市眉山・大神子地域より西方へ、佐那河内村・神山町を経て木屋平村・一字村・東西祖谷



第1図 調査地域の位置

* 剣山研究グループで発表した文献（2ページ）参照。この紀要は小川が執筆した。

山村・山城町また、吉野川南岸の石井町から池田町までの地域である。

剣山研究グループの研究テーマは、この地域の層序と構造を明確にすることであり、層序の解明にあたっては、原岩種による地質図を作成してきた。調査地域が広がるにつれて、さらに原岩堆積当時の堆積盆の構造を明らかにすることを目的として調査し、主として5千分の1の地形図を使用した。

三波川結晶片岩は、変成度の違いにより、いわゆる点紋片岩と無点紋片岩に分けることができるが、精査した地域の大部分は無点紋片岩の分布地域である。

1955年に岩崎正夫は「眉山付近の変成岩類」について発表し、1963年には剣山研究グループによる「徳島市周辺の地質」について、同じく「四国東部結晶片岩地域の地質」について発表した。

四国の三波川帯の層序は、四国中央部吉野川峡谷大歩危地域において、1890年 HARADA の論文以来多くの研究がなされてきたが、小島(1951)、小島・光野(1966)の研究が標準層序とされてきた。

剣山研究グループは、西方へ調査地域を広げ、1984年に「四国中央部 大歩危地域の三波川帯の層序と地質構造」を発表した。

これまでの研究で、前記小島らとは異なる結果を得た。この紀要では、1963年以来調査研究を続けてきた三波川帯の概要について報告する。

剣山研究グループの発表した文献

- 1 岩崎正夫・加治敦次・安田治男・笠井正也・小川祺文(1963)
徳島市周辺藍閃片岩地域の地質と岩石 徳島大学学芸紀要13巻 21—35
- 2 徳島市周辺の地質と岩石 “ 55—63
- 3 坂東裕司・林正雄・入谷豊宏・石原梢・岩崎正夫・笠井正也・加治敦次・中山勇・小川祺文・佐藤博孝・植村清治・安田治男(1963)
四国東部結晶片岩地域の地質 地球科学69号 16—19
- 4 岩崎正夫・加治敦次・塩田次男・小川祺文・坂東ハルエ(1966)
西祖谷山村の地質 阿波の自然 西祖谷山村調査報告書 1—5
- 5 岩崎正夫・小川祺文・笠井正也・加治敦次・山口昭典(1968)
神山町の地質 阿波の自然 神山町調査報告書 7—15
- 6 石原梢・岩崎正夫・小川祺文・大橋博・加治敦次・塩田次男・浜口太郎・坂東ハルエ・前田治夫・真鍋憲昭(1970)
眉山・城山の地質 総合学術調査報告 阿波学会郷土研究発表紀要 71—82
- 7 阿子島功・寺戸恒夫・岩崎正夫・中川衷三・須鎗和己(1971)
徳島県の地質 徳島県発行
- 8 岩崎正夫・加治敦次・塩田次男・小川祺文・坂東ハルエ(1971)
剣山北斜面の地質 剣山・県民の森学術調査報告書 11—16
- 9 岩崎正夫・植村清治・小川祺文・加治敦次・塩田次男・中山勇(1975)
四国東部三波川結晶片岩地域の堆積盆の変化(その1) 地団研専報第19号 71—76
- 10 岩崎正夫・加治敦次・中山勇・小川祺文・塩田次男・植村清治(1977)
四国中央部大歩危背斜南部地域の地質 地質雑83 27—32
- 11 加治敦次・牧野州明・森永宏・中山勇・小川祺文・高須晃(1984)
四国中央部大歩危地域の三波川帯の層序と地質構造 地球科学38巻1号 53—63
〔この論文中()内の数字は上記文献の番号である。〕

2 三波川帯に分布する岩石と鉱物

三波川帯に分布する岩石は、広域変成作用を受けた結晶片岩であるが、変成作用を受ける前の岩石（原岩）の種類により分類することができる。

泥岩が変成作用を受けると、泥質片岩になり、砂岩は砂質片岩になっている。

チャートのように珪酸に富む岩石は、珪質片岩（石英片岩）になり、火山性のよう岩・火山灰等からできたものは、塩基性片岩になっている。

いっばんに片理がよく発達しているが、これは変成作用を受けるとき、温度・圧力の変化の上に偏圧がはたらいたためである。

その結果、角閃石のような細長い方向性をもつ鉱物や、白雲母・石墨などの平面的な鉱物が一平面上に集まって成長し、一定の方向に割れやすい性質をもっている。

また、これらの岩石にはいわゆる点紋（曹長石の斑状変晶）をもつものと、またないものがあり、点紋をもつ岩石は、もたないものに比べて変成度が高いと考えられている。

◦泥質片岩

泥岩を原岩として、石墨質を多く含むため黒色または灰色をしている。

構成鉱物は、石英・曹長石・緑泥石・石墨を主とし、点紋をもつものでは、ザクロ石・電気石を含有することがある。

石墨・緑泥石等よりなる黒色の部分と、曹長石・石英等よりなる白色の部分の縞状をなし、平板状にうすく割れやすい性質をもっている。また点紋帯の泥質片岩では、曹長石斑状変晶の中に塵状の炭質物が含まれ、黒色の斑点がみられる。

◦砂質片岩

砂岩を原岩とし、変成の程度によりもとの砂粒が残存しているものもある。

泥質片岩との中間型のものもあり、泥質片岩と区別し難いものもある。

構成鉱物は、石英・曹長石・白雲母・緑泥石・パンペリー石等である。点紋帯の砂質片岩には黒雲母を含むものもある。

◦礫質片岩

分布地域は限られている珍しい岩石である。吉野川峡谷大歩危にみられ、東へは国見山南斜面から祖谷川峡谷を経て田ノ内に至る地域に分布し、礫岩を原岩とする。

礫の原岩は、花崗斑岩・石英斑岩が大部分をしめ、石英閃緑岩・安山岩・砂岩・泥岩などである。

◦珪質片岩（石英片岩）

チャートまたは珪酸に富む岩石を原岩とし、構成鉱物は砂質片岩と似ている。

堅硬な岩石で、岩石の色により区別することができる。

白雲母を多く含むものは白色で、緑泥石を含むものは淡緑色の石英片岩である。

その他、紅簾石を含むものは淡紅色となり赤鉄鉱が多くなれば淡赤色を呈する。

○ 塩基性片岩

塩基性の火山噴出物（よう岩・火山灰）や火岩碎屑物を原岩とする変成岩である。

いっぱんの塩基性片岩は緑色であるが、藍閃石を多く含むものは暗青色である。

無点紋帯では、輝石や角閃石を残存鉱物として含むことがあり、もとの火山岩の組織が残っていることがあるが、点紋帯では原岩の組織は残っていない。

構成鉱物は、無点紋帯では曹長石・石英・緑泥石・緑簾石・陽起石・パンペリー石・藍閃石・白雲母・方解石などが多くみられるが、点紋帯ではパンペリー石がなく、緑色角閃石・黒雲母・ザクロ石を含むことがある。

三波川帯の変成岩中にみられる鉱物は、次のようなものがある。

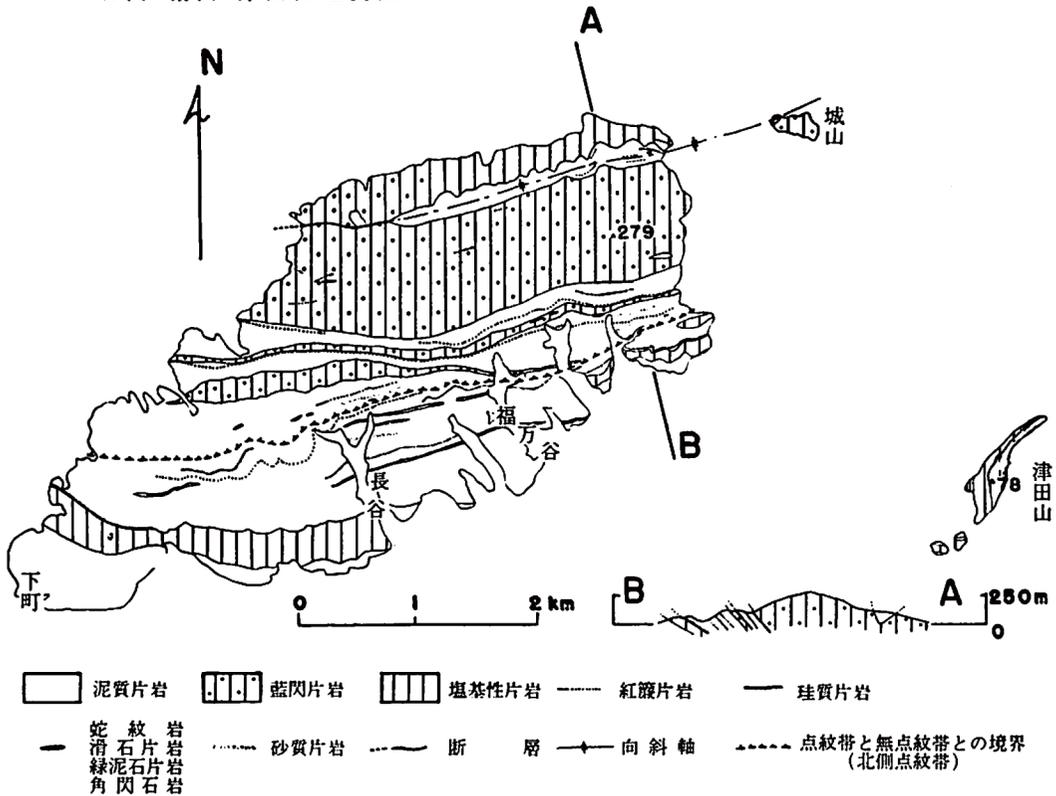
「眉山・城山の鉱物」として、総合学術調査報告「徳島」（1970）より抜粋しておく。

眉山・城山の鉱物

- 1 エヂリン aegirine $\text{NaFe}(\text{SiO}_3)_2$
単斜晶系、粒状、黄～緑色、輝石の一種
- 2 陽起石 actinolite $\text{Ca}_2(\text{Mg,Fe})_5(\text{OH})_2\text{Si}_8\text{O}_{22}$
単斜晶系、柱状、緑色、角閃石の一種
- 3 曹長石 albite $\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$
単斜晶系、短柱状、白色
- 4 鉄礬ザクロ石 almandine $\text{Fe}_3\text{Al}_2\text{Si}_3\text{O}_{12}$
等軸晶系、粒状、赤・緑・黄
- 5 燐灰石 apatite $\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3(\text{F,Cl})$
六方晶系、柱状、白色
- 6 パロアサイト barroisite $\text{CaNaMg}_3\text{FeAl}_2\text{Si}_7\text{O}_{22}(\text{OH})_2$
単斜晶系、柱状、暗緑色、アルカリ角閃石の一種
- 7 ブラウン鉱 braunite Mn_2O_3
正方晶系、粒状、黒
- 8 方解石 calcite CaCO_3
六方晶系、菱面体、白
- 9 黄銅鉱 chalcopyrite CuFeS_2
正方晶系、塊状、黄金色
- 10 緑泥石 chlorite $\text{Mg}_5\text{Al}_2\text{Si}_3\text{O}_{10}(\text{OH})_8$ ただし三波川帯産
単斜晶系、板状、緑色
- 11 緑レン石 epidote $\text{Ca}_2\text{Al}_2\text{FeSi}_3\text{O}_{12}(\text{OH})$
単斜晶系、柱状、黄～緑色

- 12 藍閃石 glaucophane $\text{Na}_2\text{Mg}_3\text{Al}_2\text{Si}_8\text{O}_{22}(\text{OH})_2$
単斜晶系, 柱状, 濃紺色, アルカリ角閃石の一種
- 13 藍閃石質陽起石 glaucophanic actinolite $\text{CaNaMg}_4\text{AlSi}_8\text{O}_{22}(\text{OH})_2$
単斜晶系, 柱状, 暗緑色, 角閃石の一種
- 14 セキボク graphite C
六方晶系, 板状, 黒
- 15 赤鉄鉱 hematite Fe_2O_3
六方晶系, 板状, 黒
- 16 菱苦土鉱 magnesite MgCO_3
六方晶系, 菱面体, 白
- 17 マグネシヨウリーベカイト magnesioriebeckite $\text{Na}_2\text{Mg}_3\text{Fe}_2\text{Si}_8\text{O}_{22}(\text{OH})_2$
単斜晶系, 柱状, 濃紺色, アルカリ角閃石の一種
- 18 磁鉄鉱 magnetite Fe_3O_4
等軸晶系, 8面体, 黒
- 19 微斜長石 microcline $(\text{K}, \text{Na})\text{AlSi}_3\text{O}_8$
三斜晶系, 塊状, 白色
- 20 白雲母 muscovite $\text{KAl}_3\text{Si}_3\text{O}_{10}(\text{OH})_2$
単斜晶系, 板状, 白色
- 21 紅靡石 piedmontite $\text{Ca}_2\text{AlFeMnSi}_3\text{O}_{12}(\text{OH})$
単斜晶系, 柱状, 赤色
- 22 パンペリー石 pumpellyite $\text{Ca}_4\text{Al}_5\text{MgSi}_6\text{O}_{23}(\text{OH})_3 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$
単斜晶系, 柱状, 淡緑色
- 23 黄鉄鉱 pyrite FeS_2
等軸晶系, 立方体, 黄金色
- 24 石英 quartz SiO_2
六方晶系, 塊状, 白色
- 25 バラ脚石 rhodonite $(\text{Mn}, \text{Fe}, \text{Ca})\text{SiO}_3$
三斜晶系, 板状, 赤・桃・黄色
- 26 金紅石 rutile TiO_2
正方晶系, 柱状, 黄～赤褐色
- 27 蛇紋石 serpentine (antigorite) $\text{Mg}_3\text{Si}_2\text{O}_5(\text{OH})_4$
斜方晶系, 板状～セナイ状, 緑色
- 28 マンガンザクロ石 spessartite $\text{Mn}_3\text{Al}_2\text{Si}_3\text{O}_{12}$
等軸晶系, 粒状, 赤～黄褐色
- 29 ステルプノメレイン stilpnomelane $(\text{Fe}, \text{Mg})_{12}(\text{Al}, \text{Fe})_{17}\text{Si}_{32}\text{O}_{94} \cdot 10\text{H}_2\text{O}$
単斜晶系, 板状, 茶褐色
- 30 滑石 talc $\text{Mg}_3\text{Si}_4\text{O}_{10}(\text{OH})_2$
単斜晶系, 板状, 白色
- 31 チタン石 titanite (sphene) CaTiSiO_5
単斜晶系, くさび形, 褐・黄・緑・赤・黒
- 32 電気石 tourmaline $\text{Ca}_5(\text{Al}, \text{Fe})_{27}(\text{Si}, \text{B})_{27}\text{O}_{86}(\text{OH})_4$
六方晶系, 柱状, 黒
- 33 ベスブ石 vesuvianite $\text{Ca}_2\text{Al}_2(\text{OH}, \text{F})\text{Si}_2\text{O}_7$
正方晶系, 短柱状, 赤, 緑色

眉山・城山・津田山地質図



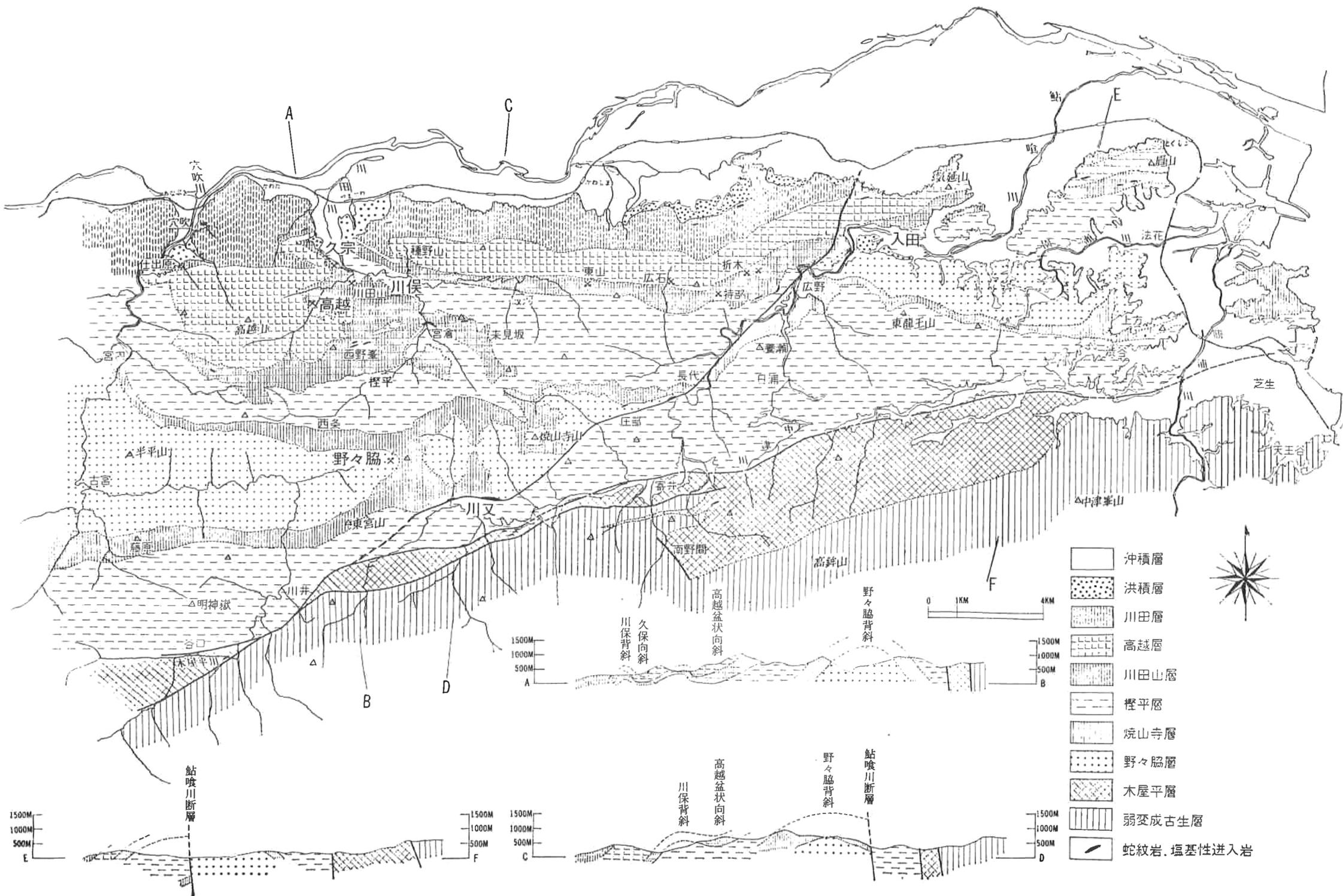
第3図 眉山・城山・津田山地質図(6)

3 層序と岩相 (3.9.11)

調査区域は、岩相の特徴、紅糜石英片岩や赤鉄鉱石英片岩を鍵層として、また一部地域では、塩基性片岩を鍵層として層序区分を行った。

東部地域では、川田層・高越層・川田山層・樫平層・焼山寺層・野々協層の6層に区分し、貞光川流域では、野々協層の下部層として友内山層・土釜層・端山層を区分した。

大歩危地域では、小島らによる層序区分を再検討し、三縄層・小歩危層・川口層に区分した。なお小歩危層と川口層は後述するように、小歩危層の最上部を除いて同時異相の関係にある。



第4図 三波川帯東部地域地質図(3)

三波川結晶片岩の層序 (東部地域・貞光川地域)

地 層 名	層 厚	岩 相	
川 田 層	200~600m+	泥質片岩・塩基性片岩互層	点 紋 片 岩
高 越 層	200~1000m	塩基性片岩 (藍閃片岩が多い) 下位にキースラーガーあり	
川 田 山 層	0 ~ 500m	上位にキースラーガーあり 塩基性片岩 (藍閃片岩が多い) 泥質片岩互層	
檜 平 層	1500m ±	泥質片岩	無
焼 山 寺 層	200m ±	泥質片岩・珪質片岩互層	
野々脇層	1000~2000m	上部 泥質片岩・塩基性片岩互層 (キースラーガーを含む) 泥質片岩・砂質片岩互層 下部 塩基性片岩・珪質片岩 (石灰質片岩)	点 紋 片 岩
友 内 山 層	800~1000m	泥質片岩・砂質片岩互層	
土 釜 層	200~300m	砂質片岩・泥質片岩互層 (塩基性片岩をはさむ)	
端 山 層	200m +	砂質片岩	

(大歩危地域)

地 層 名	層 厚	岩 相	
三 組 層	900m +	泥質片岩を主とし珪質片岩・砂泥互層片岩・砂質片岩・塩基性片岩よりなる, キースラーガーあり	点紋片岩
小 歩 危 層	1200~1500m+	砂質片岩を主とし礫質片岩・珪質片岩・砂泥互層片岩よりなる	無 点 紋 片 岩
川 口 層	1000m +	泥質片岩を主とし塩基性片岩・珪質片岩, まれに石灰質片岩・砂質片岩, キースラーガーあり	

◦ 川 田 層

標式地は、高越山北麓の山川町川田である。この地層は、調査地域の最北部に分布している。

泥質片岩と塩基性片岩の互層であり、曹長石斑状変晶（点紋）を有し、調査地域中では構成鉱物は最も粗粒である。

◦ 高 越 層

標式地は高越山周辺である。高越山付近では、この地層は平面的にみて南方に張り出し幅3 Km以上にわたり露出しているが、東方徳島市までの区間では、幅1 Kmの帯状に分布している。点紋を有し、塩基性片岩を多量に含む、藍閃片岩も多い。紅簾石石英片岩もかなり多い。貞光川流域の端山ドーム状背斜北側では薄い、半田川以西では再び広がっている。

◦ 川 田 山 層

標式地は、高越山東縁の川田山である。高越層の南縁に沿って分布するが、高越地域の西方では尖滅している。泥質片岩と塩基性片岩の互層で点紋を有し、藍閃片岩も多い。

◦ 樫 平 層

標式地は、高越山東縁の宮倉で、川田山層分布地域の南縁に沿う地域と、三波川帯南縁の御荷鉾線の北側に接する地域とにわかれて分布する。

厚い泥質片岩を特徴とする地層で、うすい珪質片岩、塩基性片岩を数層夾在している。小松島市西方地域のように、砂質片岩、泥質片岩の互層が卓越しているところもある。

石英片岩の一部は、石鉄鉱石英片岩であり、スティルプノメレンを含むものもしばしばみられる。

樫平層の最下部には、厚さの変化のはげしい塩基性片岩がくることがある。また、パンペリー石を含む塩基性片岩もある。

◦ 焼 山 寺 層

標式地は、焼山寺山周辺である。泥質片岩を主とし、珪質片岩を数枚はさんでいる。珪質片岩は紅簾石を含むものが多く、しばしば薄い塩基性片岩をともなっている。

塩基性片岩の中には、パンペリー石が見出される。

焼山寺層は、高越地域南方まで分布しているが、端山ドーム状背斜の北翼では尖滅しているようである。点紋はみられない。

◦ 野々 脇 層

標式地は、木屋平村野々脇である。焼山寺層の下部に位置し、上部と下部では岩相を異にする。また、地域により岩相の変化が大きい。東部地域では、上部層は泥質片岩と塩基性片岩が互層をなしているが、量比は地域によって一定しない。下部層は、塩基性片岩が少なくなり、徳島市入田より法花

に至る地域では砂質片岩と泥質片岩の互層がみられる。

しかし、貞光川地域の下部層では、塩基性片岩や珪質片岩もあり、石灰質片岩を夾在している。

塩基性片岩の中には、枕状角礫岩の組織の残っているものもあり、単斜輝石の残晶の残っているものもある。

一字村古見の南方には、厚さ100mに達する塩基性片岩層があるが、東西方向に延長すると薄くなっている。層状含銅硫化鉄鉱床を胚胎している。この塩基性片岩は、野々脇鉱床をもつ塩基性片岩層に對比される。

・友内山層

標式地は、貞光町友内山周辺である。野々脇層の下部に位置し、泥質片岩と砂質片岩の互層であるが、両者の量比は場所により異なっている。端山ドーム状背斜の北側では泥質片岩を主とし、南側では砂質片岩の量が増加する。

・土釜層

標式地は端山・土釜間の貞光川流域である。

砂質片岩と泥質片岩の互層に、数枚の塩基性片岩を夾在する。最上部の塩基性片岩は、紅簾石または赤鉄鉱を含む赤色珪質片岩をともなっている。部分的には藍閃片岩もある。

この塩基性片岩にも、層状含銅硫化鉄鉱床を胚胎している。

・端山層

標式地は、貞光町端山の貞光川である。この地層は、貞光川川底および穴吹町梶山の谷底に、端山ドーム状背斜の核となる地層として分布する。

やや粗粒の砂質片岩を主とし、残存鉱物として、ジルコン・微斜長石を含んでいる。

・三縄層

標式地は、仙野以北から中央構造線にいたる吉野川沿いの地域である。仙野北方より南東へ明瀬、小祖谷、これより南西へ一字、赤野へと下位の小歩危層をとり囲むように分布している。

岩相は、泥質片岩を主体として、塩基性片岩、砂質片岩、珪質片岩よりなる。泥質片岩は一般に均質で、砂質片岩を混じえることは少ない。

塩基性片岩は層厚10m以下で、走向方向への連続性が悪いことが多い。また、珪質片岩、泥質片岩の薄層を夾在している。

松尾川河床では、塩基性片岩の非常に厚い岩層がみられるが、北西側への延長では層厚を減じ腕山北西では消滅している。南方への延長でも層厚は急激に減じ消滅している。

松尾川河床では、野々脇層下部層でみられるような枕状溶岩や枕状角礫岩の原岩構造が残存している。単斜輝石の斑晶も残存しているのが認められる。

三繩層中に点紋帯と無点紋帯の境界があり、これより北方では、曹長石斑状変晶がみられるようになる。無点紋帯から点紋帯への変化は漸移的であるが、その境界は地層面にほぼ平行である。

・小歩危層

標式地は、小歩危から大歩危にかけての吉野川河床である。分布地域は、大歩危、一字北方、日比原、明瀬、仙野を結ぶ線より西部で次にのべる川口層の分布していない地域である。

岩相は、全体として砂質片岩が卓越するが、砂泥互層片岩、礫質片岩、珪質片岩よりなる。

小歩危層内の岩相分布には規則性がみられ、南部ほど粗粒になり、北部にむかって細粒になる傾向がある。

分布の南縁部付近では粗粒の砂質片岩になり、礫質片岩の薄層をはさむ。北半部では砂泥互層片岩が多くなり、北西部の川口層分布地域へむかって泥質片岩の割合を増している。

砂質片岩中には鍵層がないので、厳密ではないが岩相変化は、層準によるよりも水平方向の変化が大きいと考えられる。

・川口層

標式地は、川口付近の吉野川河床である。

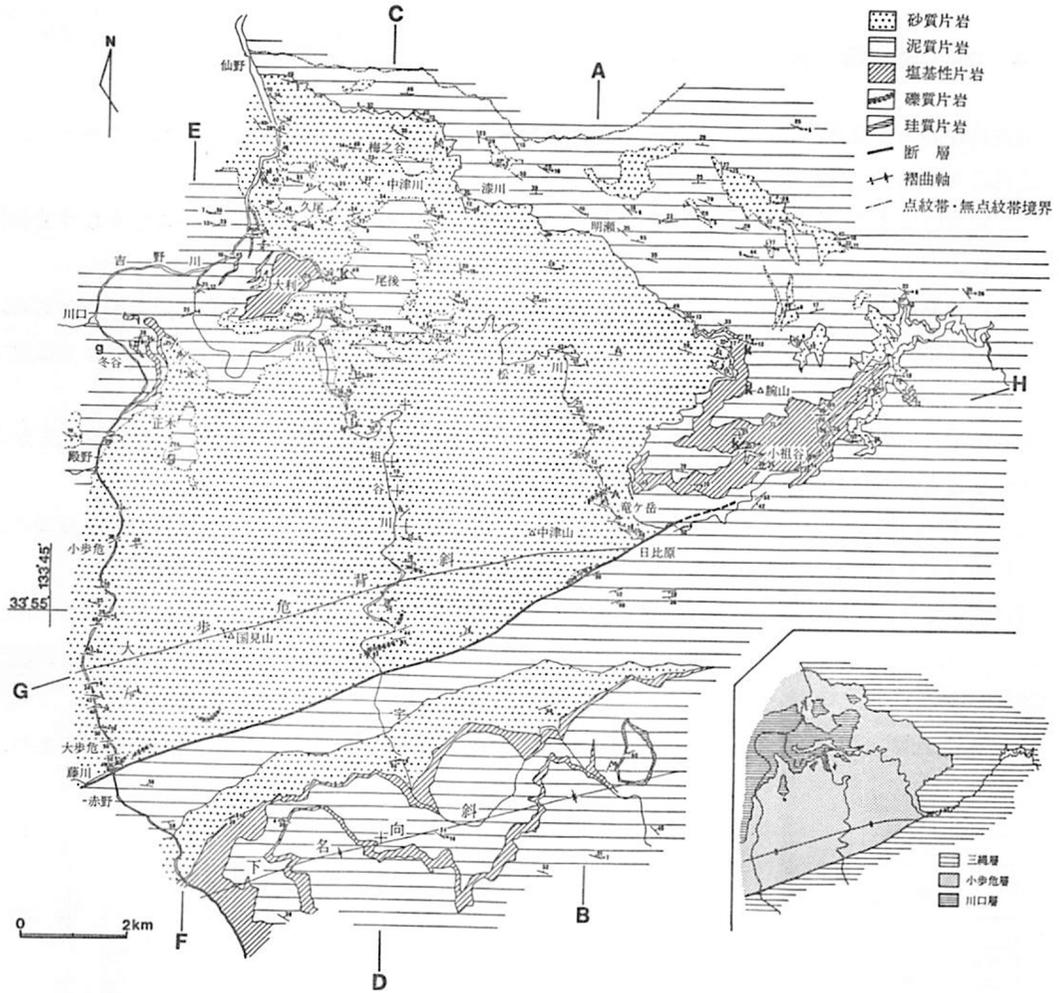
分布地域は吉野川沿いでは小歩危峡谷左岸殿野、川口を経て祖谷川との合流点の北方までの地域、大利から尾後にかけての地域、久尾、中津川、および正木東方の地域に分布する。

岩相は泥質片岩を主体とし、塩基性片岩、珪質片岩、まれに石灰質片岩、砂質片岩、変はんれい岩体からなっている。

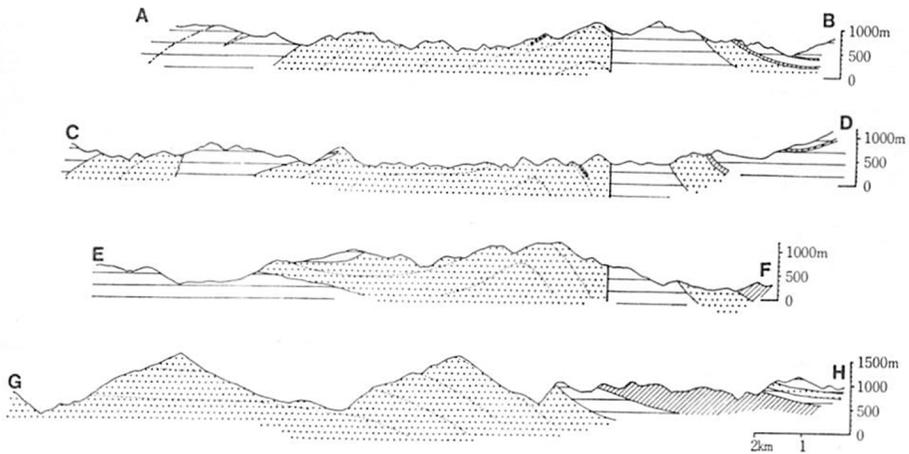
泥質片岩は一般に黒色均質であるが、小歩危層との境界部付近では、互層状に砂質片岩をはさむことが多い。

塩基性片岩は一般に走向方向への連続性の悪いものが多いが、大利から尾後にかけてのものはよく連続している。

珪質片岩は赤鉄鉱やスティルプノメレーンを含むものがあり、塩基性片岩に密接に伴う場合と、泥質片岩中に単独に存在する場合とがある。いずれも層厚は薄く、連続性は悪い。



第5図 大歩危地域三波川帯の岩相図および地質図(11)



第6図 大歩危地域地質断面図(11)

4 地 質 構 造

調査地域の地質構造は、全般的にE—WないしNW—SE，SW—NE方向の褶曲軸をもつ波状の褶曲構造で特徴づけられる。

調査地域のほぼ中央部にあたる貞光川流域と，西部の大歩危地域以西には，ドーム状をなす背斜構造がある。(11)

断層は中央構造線，御荷鉢線（三波川帯の南限）の他に，鮎喰川断層，(7)大歩危断層(11)がある。

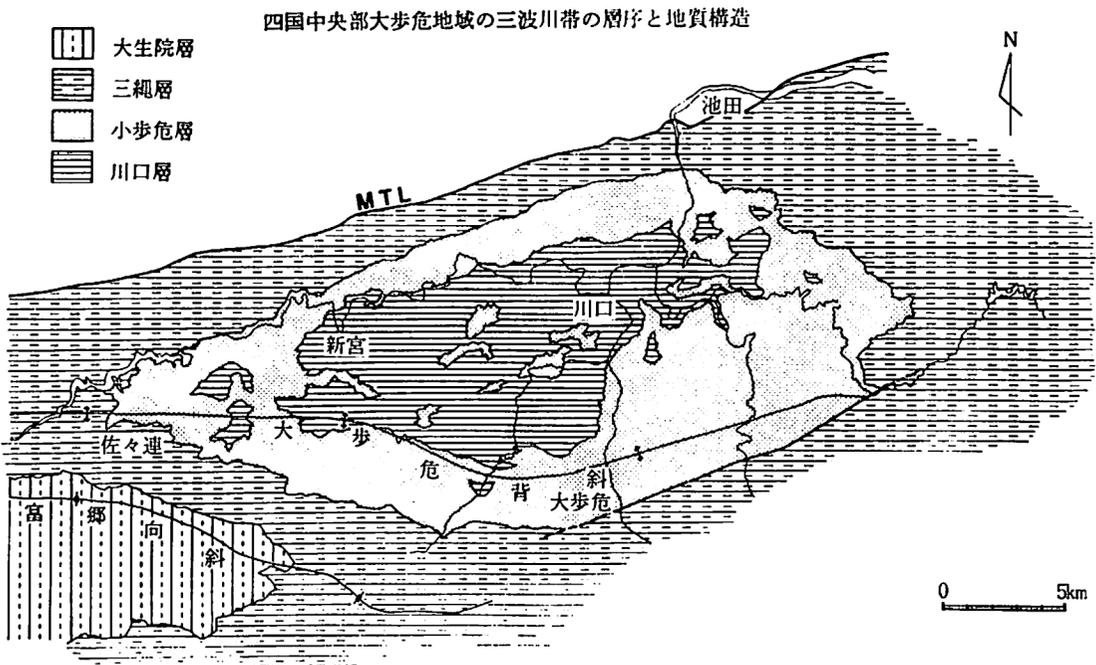
調査地域の北部に分布する点紋帯では向斜構造があり，東は徳島市眉山から西へ井川町まで追跡できる。

高越山付近を中心として，向斜構造があるが，向斜軸は高越山頂付近より東へ伸び，宮倉北方からNW—SE方向に向きをかえ，南方の尾根で浮き上がっているように見える。

点紋帯では，波長の短い褶曲がみられ，地層の傾斜は40度以上のものが多く，向斜構造，背斜構造が急傾斜で折りたたまれたものが多い。

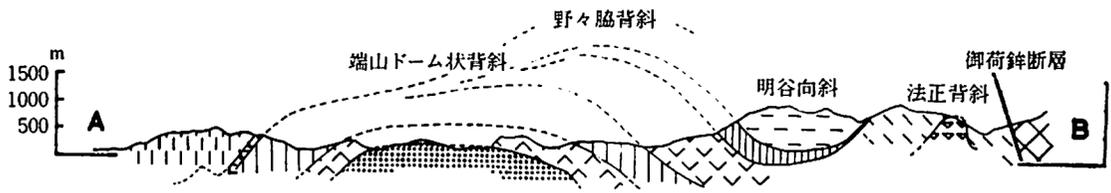
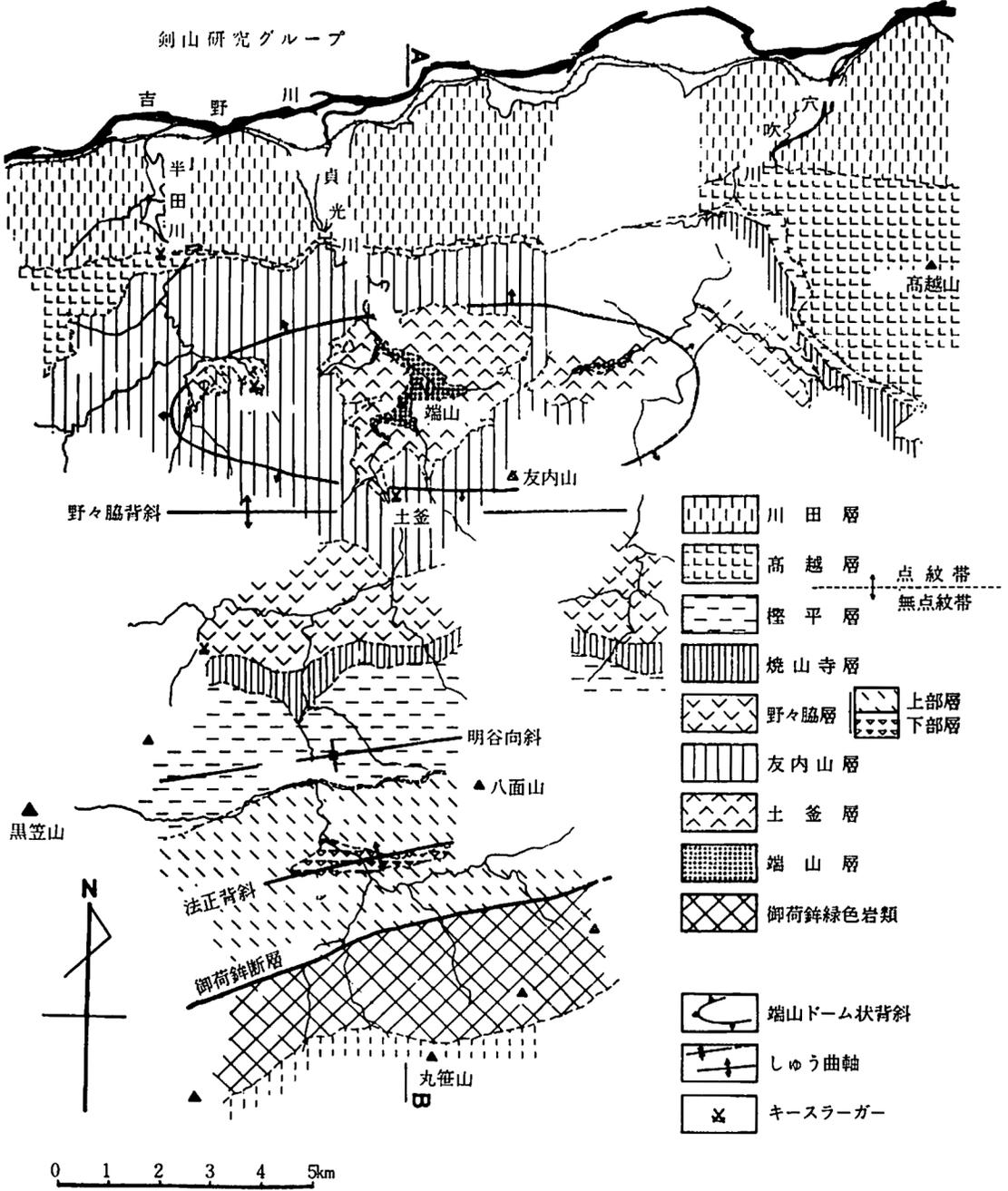
無点紋帯では，大歩危峡谷を東西に通る大歩危背斜構造がある。背斜軸の北側では北傾斜または水平に近い構造となり，南側では南傾斜となる。大歩危峡谷では背斜軸から北へ1.5～2 Kmの間は単調な北傾斜が連続するが，これから以北では北傾斜と水平な部分が数100mごとにくり返している。

南側では，大歩危断層により切断されるが，断層をへだてて南側に分布する三縄層も南傾斜であり，

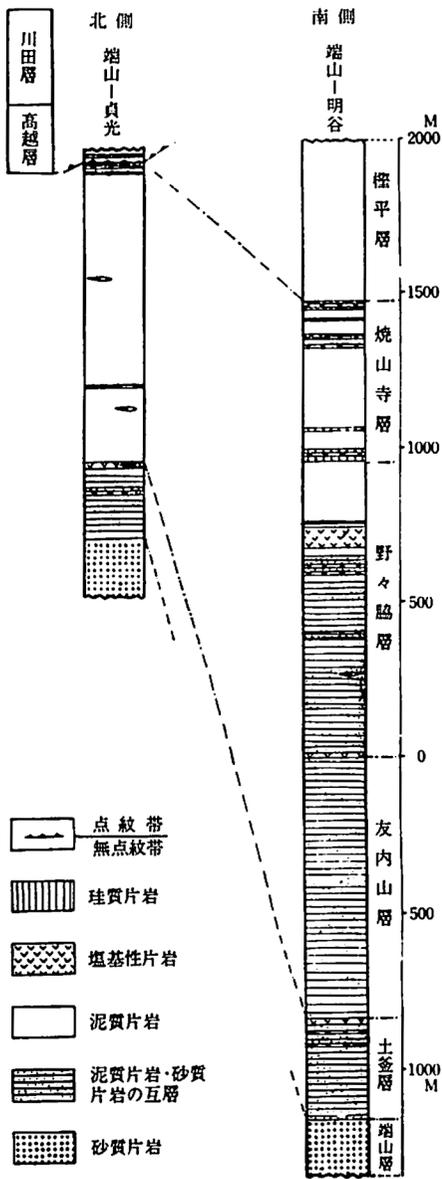


第7図 四国中央部三波川帯の地質図

土井 (1959, 1964)，光野 (1953)，SUYARI and AKOJIMA (1980) を参考に作製した。(11)



第8図 貞光川地域地質図(9)



第9図 端山ドーム状背斜両側の結晶片岩柱状図

下名向斜⁽¹⁰⁾に向かってしだいに緩傾斜になっている。

大歩危背斜の背斜軸は、大歩危から国見山、中津山の南を通り、日比原付近で大歩危断層に切断されるが、貞光川流域の土釜から東へ野々脇、焼山寺山を通る背斜へ連続しているようである。鮎喰川断層で切断されるが、更に東方への連続がみられる。

大歩危以西の調査資料⁽¹¹⁾から、川口層と小歩危層は全体として東西約32km南北約14kmのほぼ楕円状の分布をしており、(第7図)この地層は一般に楕円の外側へ向かう傾斜をしており、大規模なドーム状をなしている。

大歩危背斜軸は、このドーム状内部を通り、西部では西方へ、東部では東方へ傾斜している。

貞光川流域の端山から穴吹川にかけて、東西にのびたドーム状背斜構造がある。⁽⁹⁾(第8図)

大歩危南方の下名から、吾橋、和田へかけて下名向斜がみられる。向斜軸は東方の明谷向斜⁽⁹⁾に連続し、更に東方延長は川井付近で御荷鉾断層に切られていると推定される。

無点紋帯の泥質片岩には、こまかな褶曲構造が発達し、この軸面にそって断層が生じている。しかしこれらの断層は連続していない。

鮎喰川断層は、石井町から神山町を通り、木屋平村で御荷鉾断層に接している。

石井町童学寺西方では、この断層により塩基性片岩が左横ずれに2kmくらいずれ、鮎喰川川底では約2kmの背斜軸のずれがみられる。

大歩危断層は、大歩危南方の藤川と吉野川の合流点付近、国見山南側、日比原を通っている。この断層は、小歩危層と三縄層の境界部に位置し、付近の砂質片岩は幅数mから数10mにわたって著しく破碎されている。⁽⁷⁾

5 考察とまとめ

三波川帯の地質構造でも述べた通り、いくつかの背斜構造、向斜構造が見られるが、地域により、また、背斜軸、向斜軸の両翼の堆積物にかなりの違いが見られる。

端山ドーム状背斜部では、土釜層の堆積後沈降量の相対的に小さい地域があり、南側と北側で異なった堆積過程が考えられる。(9) (9図)

南側の堆積盆では、野々脇層から檜平層までの泥質片岩と砂質片岩の互層を主とする地層が堆積した。

海底火山活動の産物は、野々脇層、焼山寺層に存在するが、その量は東方の同じ層と比べてはるかに少ない。

このような南側の堆積が行われている間、北側の堆積盆では泥質片岩、砂質片岩の堆積は少なく、後になって高越層、川田層の原岩が堆積した。とくに高越層は、端山ドーム状背斜の東側及び西側で厚く、南へ張り出している。北側の堆積盆の特徴は、海底火山活動による塩基性火山噴出物が厚く堆積していることである。またこの地域には、藍閃片岩や、蛇紋岩、変輝緑岩の小貫入岩体が見られる。

大歩危背斜部は、地向斜期の相対的な上昇域であることが、地層の特徴及び層厚の変化から推定される。南側の地域は、相対的な沈降地域となっている。この堆積盆の火成活動も塩基性片岩に代表されるが、層準により特徴があり、端山ドーム状部の南側堆積盆との類似性を示している。(10)

大歩危ドーム状部の地層分布をみると、外側に小歩危層が分布し、内側に川口層がある。

川口層と小歩危層の関係は、大歩危地域と基本的に同じで、小歩危層の最上部を除き、同時異相と考えられる。

小歩危層中の礫質片岩には、多量の酸性火成岩礫を含み、また砂質片岩は残粒碎屑粒としてカリ長石、石英を普遍的に含む。

これらのことは、小歩危層の後背地に大陸地殻を構成する地質帯が広く露出していたことを示している。

一方大歩危ドーム状部から西部にかけては、広大な面積にわたって川口層の泥質片岩卓越層が分布している。(11)

図 版 I

1	泥 質 片 岩	10cm	神 山 町 神 領
2	泥 質 片 岩	10cm	神 山 町 神 領
3	砂 質 片 岩	15cm	神 山 町 左 右 内
4	礫 岩 片 岩	15cm	西 祖 谷 山 村
5	紅 簾 石 石 英 片 岩	13cm	徳 島 市 眉 山
6	礫 岩 片 岩	15cm	西 祖 谷 山 村
7	石 英 片 岩	10cm	神 山 町 左 右 内
8	石 英 片 岩	13cm	神 山 町 左 右 内

図 版 II

9	塩 基 性 片 岩	15cm	徳 島 市 眉 山
10	藍 閃 片 岩	15cm	徳 島 市 眉 山
11	点 紋 塩 基 性 片 岩	10cm	徳 島 市 眉 山
12	ス テ ィ ル プ ノ メ レ ー ン 片 岩	10cm	神 山 町 阿 野
13	滑 石 片 岩	10cm	神 山 町 阿 野
14	石 灰 岩 片 岩	17cm	一 宇 村
15	角 閃 石 石 英 片 岩	5 cm	徳 島 市 眉 山
16	ザ ク ロ 石 石 英 片 岩	5 cm	徳 島 市 眉 山

图版 I

1



2



3



4



5



6



7



8



图版 II

9



10



11



12



13



14



15



16



海原古墳調査報告

岡山真知子・大塚一志

はじめに

ここに報告する海原古墳は、美馬町教育委員会が町史編纂事業の一環として発掘調査を実施した古墳である。

当館では、調査研究活動として1971年から1978年まで「徳島県内の後期古墳研究」をテーマとして取り組み、成果も上げてきた。特に、国史跡段ノ塚穴の調査によって全国でも特異な石室構造をもち、しかも、この型式の横穴式石室が段ノ塚穴周辺に数多く分布することが判明してきた。こうした特異な横穴式石室を段ノ塚穴型石室と呼び、筆者らもその研究に携わってきた^{註(1)}。

海原古墳は、この段ノ塚穴型石室の一つである。しかも、玄室東側壁の上半部を全く失っているという状況を呈しており、一早い調査と対策が望まれていた。しかし、これは段ノ塚穴型石室の強固な石室構造を示す一例でもあった。

そこで、美馬町では海原古墳の保存・活用を図るべく発掘調査を計画することになった。町史編集委員の一人でもあった岡山が調査主任を引き受け、当館もこの調査に全面的に協力することになり、実施の運びとなった。調査終了後、天井石の崩壊を防ぐべき処置もとられ、天井石構造のよくわかる横穴式石室がみることができるとのことである。

海原古墳調査に際して、美馬町史編纂室・同町文化財保護審議会をはじめ、地元の方々に多大なご尽力・ご指導を賜った。特に、藤野真宥氏・長江巖氏・地主の海原芳太郎氏には惜しみないご協力をいただいた。調査中、人骨の出土があり、徳島大学医学部第一解剖学教室に参加いただき、取り上げ、人骨の復原等にご尽力いただいた。深く感謝したい。

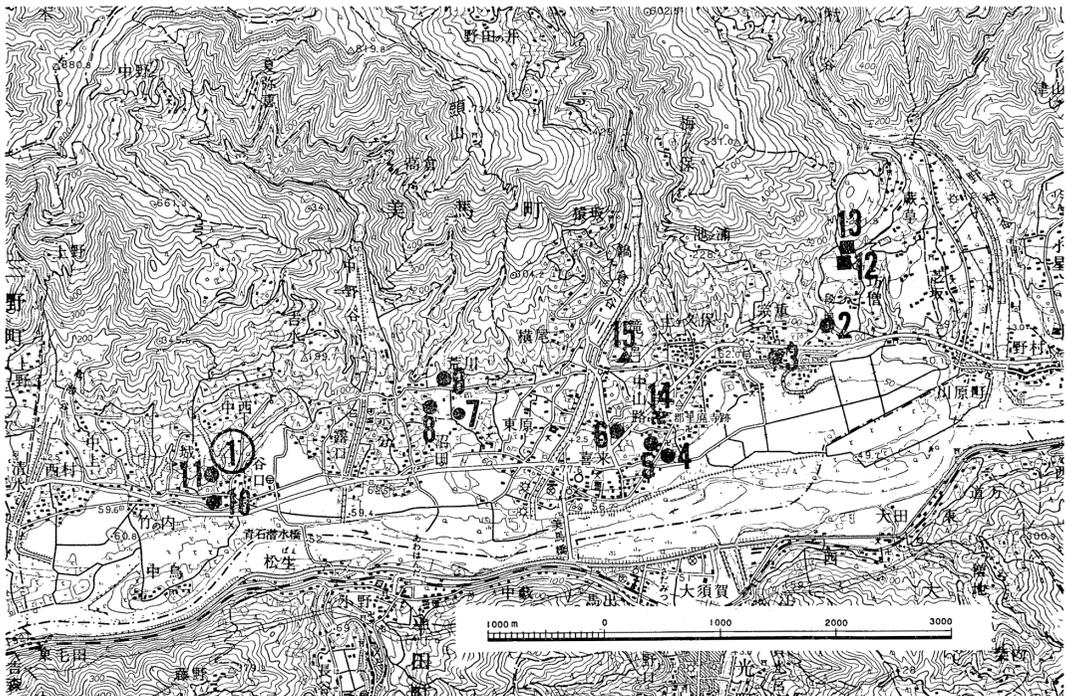
遺跡名	海原古墳
所在地	美馬郡美馬町西荒川字海原86番地
調査期間	1985年3月1日～14日
調査主体	美馬町教育委員会
調査主任	徳島県博物館学芸員 岡山真知子
調査協力	徳島県博物館・美馬町文化財保護審議会・徳島考古学研究グループ・徳島大学医学部第一解剖学教室
調査参加者 (順不同、 敬称略)	三宅良明・大塚一志・蔵本晋司・武蔵美和・絹川一徳・津田篁史・逢坂俊男・藤野真宥・長江巖・佐々木昌・藤本進・浜田武志・宮田英治・原田高俊・吉田光高・切上盛・吉本正市・大西俊彦・富永健・乃一哲久・大西靖司・河野通之・藤原徳島大学医学部第一解剖学教室(山田正興・近森憲助・山本明良・徳永・武市早苗)

I. 海原古墳の立地と歴史的環境

海原古墳は、徳島県を東に流れる吉野川中流域北岸の河岸段丘上に位置する。海拔83m程の段丘面の端部に築造され、南に開口する横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳である。

美馬町には、11基の横穴式石室が確認されており、国史跡である段ノ塚穴（太鼓塚・棚塚）に代表されるような特色ある横穴式石室が分布する。海原古墳もその中の1基である。すぐ南には荒川古墳、北に平野古墳というよく似たタイプの石室を有する古墳が並んでいる。2Km西の重清西小学校周辺にも、大国魂古墳、八幡古墳群といった同様のタイプの古墳群がみられる。段ノ塚穴・太鼓塚の横穴式石室は、全長13.1mという四国最大級の規模を誇り、玄室平面胴張り形、天井石を前後から側壁を左右から持ち送るという特色ある石室を有する。また、すぐ西に並ぶ棚塚は玄室奥に一枚石の棚を有する。こういった構造を同じくする特色ある「段ノ塚穴型石室」の一つとして、海原古墳を捉えることができる。

さらに、2Km東には、国指定史跡の郡里廃寺がある。東西94m、南北120mの寺域をもち、東に塔、西に金堂を配する法起寺式伽藍配置の白鳳期の寺院址で、現在のところ徳島県最古と考えられる。段ノ塚穴に後続すると想定でき、6世紀後半から8世紀にかけての徳島県を説明する上で、重要な地域の一つと理解できる。



第1図 海原古墳とその周辺の遺跡（5万分の1『脇町』）

- | | | | | | |
|----------|---------|----------|----------|----------|----------|
| 1 松ノ花遺跡 | 2 段ノ塚穴 | 3 真鍋塚 | 4 七人塚 | 5 願勝寺1号墳 | 6 井川塚 |
| 7 荒川古墳 | 8 海原古墳 | 9 平野古墳 | 10 八幡古墳群 | 11 大国魂古墳 | 12 坊僧池瓦窯 |
| 13 丸山窯跡群 | 14 郡里廃寺 | 15 滝ノ宮経塚 | | | |

Ⅱ 調査の概要

1) 調査の経過

海原古墳は、横穴式石室の玄室東壁上半部と羨道部天井石1枚を除き、東壁も全く失った状態であった。また、玄室の天井石は、片方の側壁の大半を失っているにもかかわらず、1枚の落石もなく互いにバランスを保っているという状況であった。しかし、今後の石室崩壊や天井石落下による事故の危険性をはらんでおり、早急な調査と保存・安全対策が望まれていた。そこで、美馬町史編纂の一環として発掘調査が実施された。

調査は、鎮魂祭が行われると、墳丘測量と併行して、土砂が厚く堆積していた羨道と玄室の発掘・実測調査へと進んでいった。

墳丘測量の結果、かなり盛り土を失っており規模・形態など明確ではないが、直径15m程の円墳と想定できた。

羨道は、土砂を除去していくうちに、多数の礫がおり重なるようにな状況であった。この礫は、全壊した羨道東壁の石材と思われる。保存を前提とした調査であることから、羨道の発掘はこの段階で終了し、実測作業に移った。

玄門部は、立石・扉石・閉塞石が認められた。

玄室は、50cm程の厚さで土砂が堆積していた。土砂を除去していくと、遺物の出土がみられたが、後世に大きく攪乱を受けていることがわかった。さらに、発掘を進めていき、床一面に砂岩の敷石を検出し、敷石上面からは、完形の金環も出土した。また、奥壁から1.1mのところでは、厚さ12cm、高さ47cmの仕切石が確認できた。

遺物は、人骨の体分をはじめ、土器・鉄器・玉類・金環などが出土した。

全調査終了後、羨道部を埋め戻し、玄室の天井石落下防止のため補強作業を行い、石室見学に危険のないよう安全対策を施した。

2) 墳丘

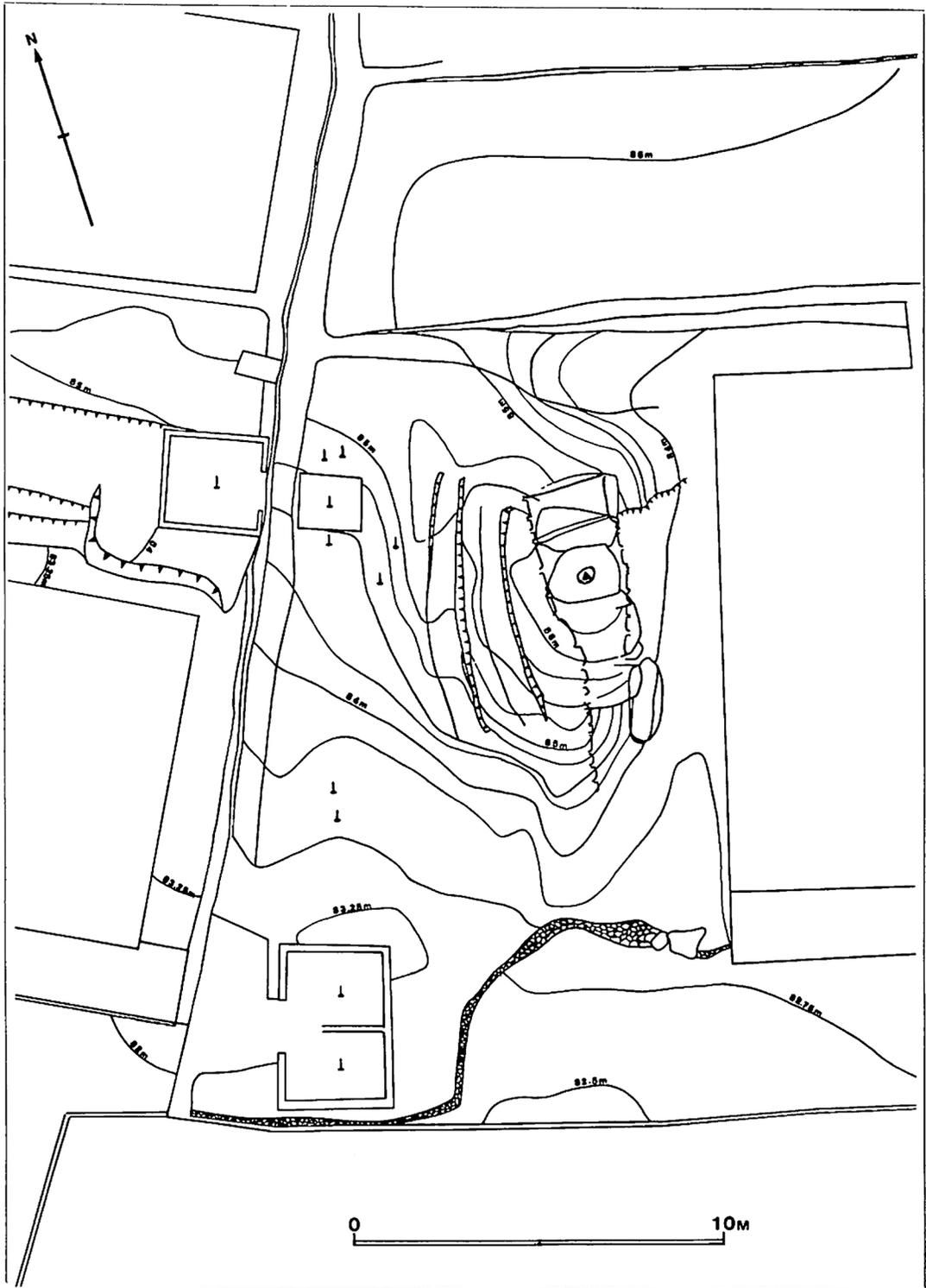
墳丘は削平などを受け、かなり盛り土を失っており、石室東壁以東の墳丘は完全に削り取られ、あまり原状を残さない状態である。かろうじて、南斜面の地形が他に比べれば残りが良いと言える。このような状態であるので明確にはわからないが、現状で直径15m・高さ3m程の円墳と考えられる。

また、墳頂部もほとんど盛土を失い、玄室の天井石が数枚露出している。少なくとも1m程度は盛土があったと考えられる。しかし、持ち送られた天井石の構築方法が良く観察できる状態である。現状での最高部は、海拔86.52mである。

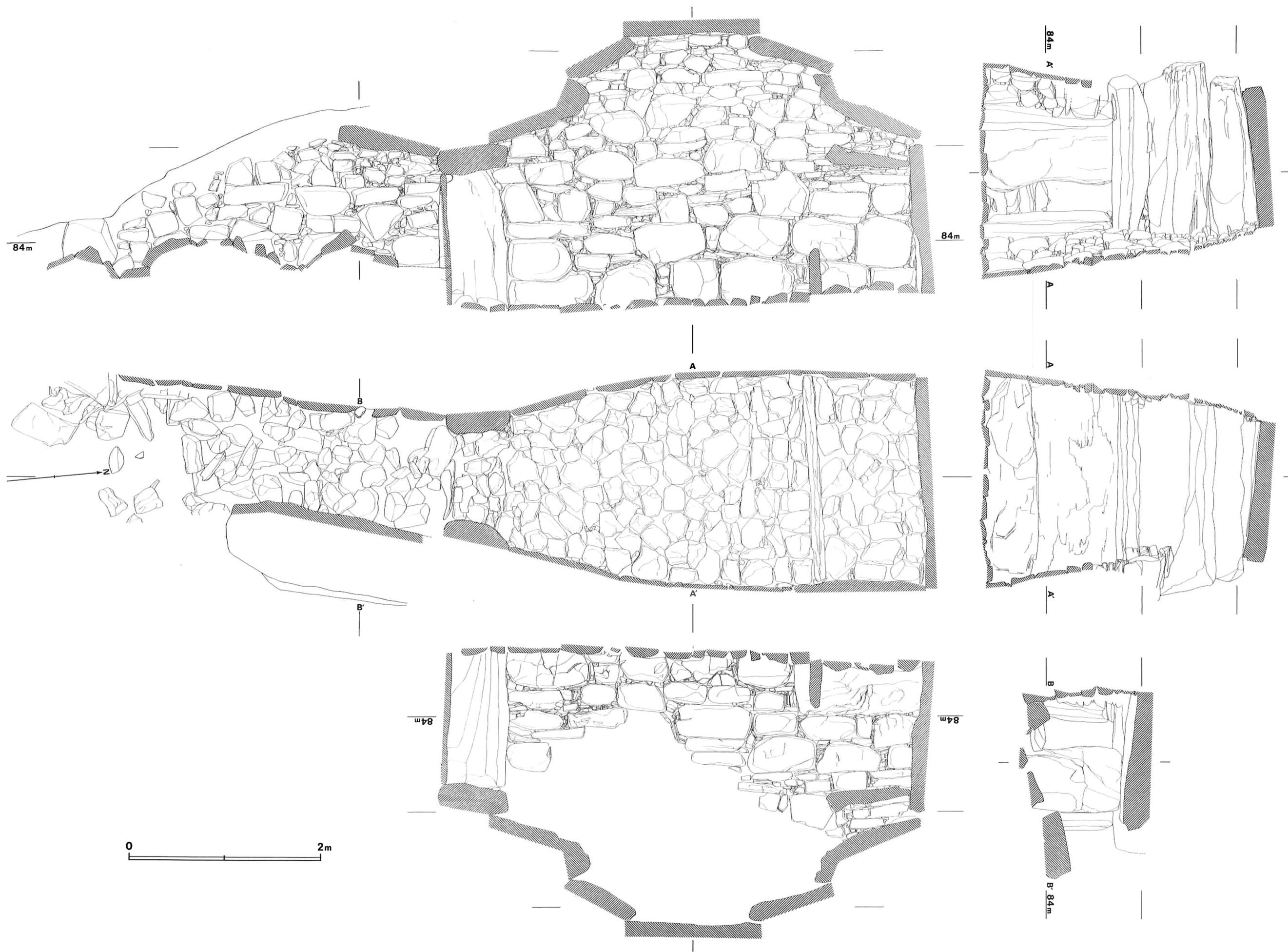
3) 横穴式石室

ほぼ南(S 5°44'20"W)に開口する横穴式石室で、現状で長さ8.4mを測る。

玄室は、長さ4.36m・入口幅1.4m・最大幅2.25m・奥壁幅2.15m・玄室中央で2.8mの高さを測る。



第2図 海原古墳墳丘実測図 (単位m, 海拔高を示す, conta25cm, ▲86.52m)



第3図 海原古墳横穴式石室実測図 (海拔高を示す)

現状は、東壁の大半が崩壊しており、床面から2段～5段の石積み、約50cm～150cm程しか残存しない状態である。西壁は完全に残存している。使用石材は砂岩を主体として結晶片岩を併用している。

東壁の大半を失っているにもかかわらず、持ち送られた5枚の天井石は、1枚も落下することなく互いにバランスを保っている。「段ノ塚穴型石室」の強固さ、また、石室構築技術の精巧さを明確に示している石室である。特色ある横穴式石室の構造を解明する上で、大変貴重な資料となる。

玄室平面は胴張り形で、床一面には砂岩の敷石が敷きつめられていた。また、奥壁から1.1mのところ、幅217cm、厚さ12cm、高さ47cmの結晶片岩の仕切石が設けられており、奥壁との間に1区画を意図したものと考えられる。奥壁は、結晶片岩の1枚石で構築されている。この奥壁の上部前面に接して、床高137cmのところ、厚さ20cm、長さ88cmの結晶片岩の石棚が両側壁に挟みこまれて設置されている。所有者の話を考え合わせると、この区画内に少なくとも一体の遺体が安置されていたと考えられる。この部分は、47cmの高い板石で仕切られ、上部には、長さ88cmの石棚が設けられている。遺体を埋納するのに十分なスペースである。

玄門部は、幅70cm程の結晶片岩の幅広い立石により構築され、高さ1.4mを測る。2つの立石を柱として、その上に1枚の天井石を構築し、それをテコとして玄室の天井石を持ち送っている。

また、立石の羨道側には、幅65cm、高さ135cmの結晶片岩板状の扉石が確認できる。西側の立石と扉石は、約30cmの間隔がある。この部分には、玄室床面から、約65cm位のところまで石が積み込まれ閉塞が行われている。

羨道は、長さ3.5m、幅不明、高さは、残存部で1.18mである。西壁はほぼ完全に残っているが、東壁を全く失った状態である。羨道からおりかさなるように出土した多数の礫は、壊れた東壁のものと考えられる。側壁の使用石材は、砂岩を主体にして結晶片岩を併用している。

天井石は、玄門側に1枚だけ残っている。羨道東側に横たわる結晶片岩の巨石は、おそらく羨道の天井石がくずれ落ちたものと思われる。

海原古墳の横穴式石室の特徴をまとめ、列挙すると以下のとおりである。

- 1) 玄室平面胴プランが張り形を呈するが、若干末広がりである。
- 2) 玄室の天井が穹窿式で、立石に構築した天井石から2枚、奥壁の1枚石から2枚の天井石を持ち送り、最後に1枚の天井石でおさえる構造である。
- 3) 幅広い立石により玄門部を構成し、片岩の板石を扉石としている。
- 4) 石棚をもち、その直下に高さ約50cmの仕切石があり、1つの区画が想定できる。
- 5) 玄室の床一面に敷石をもつ。

以上の5点が海原古墳の横穴式石室の形態・構造上の特徴として指摘できる。特に、4・5項目は、周辺に分布する特色ある横穴式石室「段ノ塚穴型石室」には、現在のところ確認されている実例は希薄である。玄室を仕切石で区画する方法は、願勝寺1号墳(美馬町)^{註(2)}・ひびき岩17号墳(石井町)^{註(3)}に次いで、県内で3例目である。玄門部に残されている扉石もあまり例がない。また、床の敷石は「段ノ塚穴型石室」で確認されたのは、海原古墳だけである。

その他1～3項目は、美馬郡周辺に分布する「段ノ塚穴型石室」の特徴である。

4) 遺物出土状況

土砂が厚く堆積した羨道・玄室から出土した遺物は、土器では 須恵器、土師器、瓦器、緑釉陶器、また、玉類、金環、刀子、そして、3体の人骨片が確認できた。しかしながら、後世の攪乱も認められ、古墳築造当時のものとは考えられない遺物、上述の中世の土器、また、獣骨、古銭なども多く出土した。

以下、羨道・玄門部・玄室における遺物の出土状況について述べていきたい。

(1) 羨 道

羨道からは、少量の土器片の他に人骨片（SB-1～SB-6）、主として頭部が出土した。人骨の分析は、徳島大学医学部第1研究室の山田正興教授に依頼した。詳細は、別の機会に譲りたい。

なお、羨道から出土した人骨は、所有者によると、数十年前は、玄室奥の仕切られた区画内に、頭部を東に向けて安置されていたものを新しく羨道へ移し、埋葬したものであるとの話も聞かれることから、比較的最近に移葬されたものと思われる。

(2) 玄 門 部

発掘前の玄門部は、両側の立石および天井石直下まで 礫まじりの厚い土砂で羨道との間がほぼふさがっていた状況であった。この堆積した土砂中からも遺物が出土した。

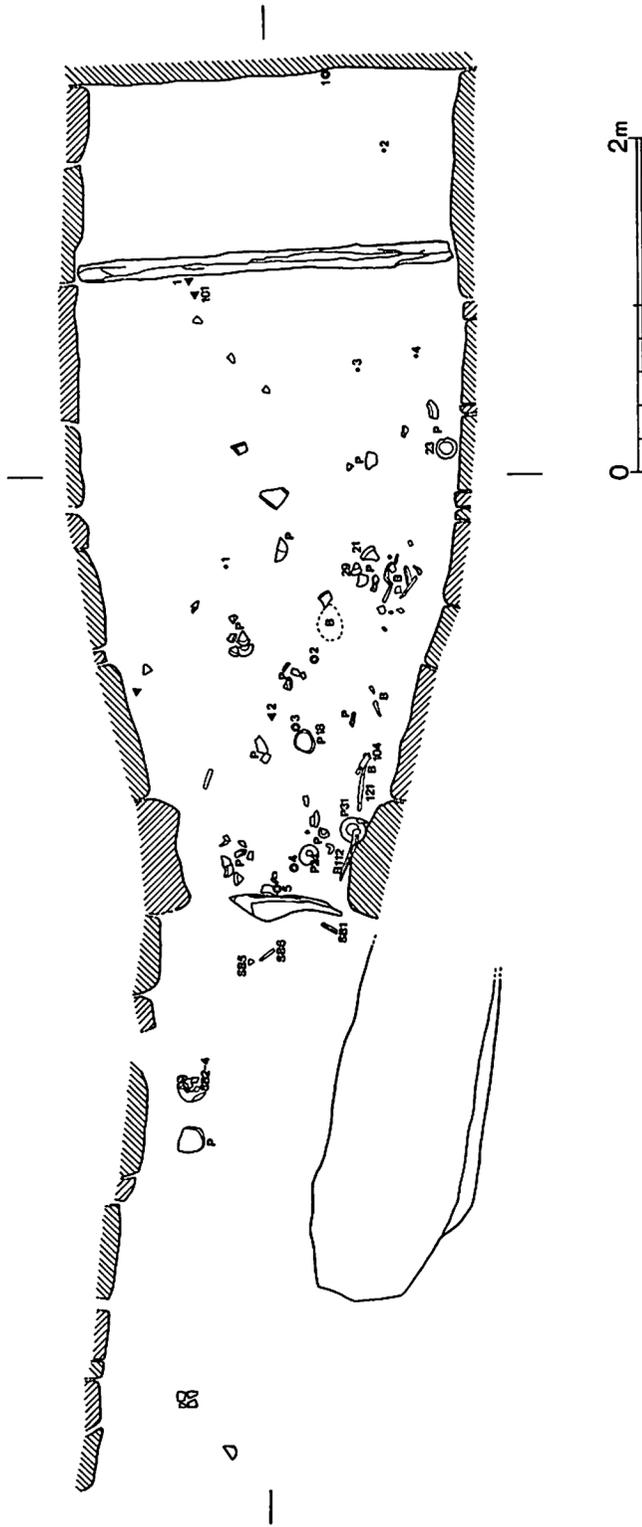
床面付近からは、金環2点（K-4, 5）、土器片、人骨片（B-105～107, B-112）、また、完形の瓦器碗2点（P-24, 31）などが出土した。それぞれの出土位置はあまり原状をとどめていないものと考えられる。また、後に外部から持ち込まれたと思われる遺物も出土している。盗掘を受け、遺物が人為的に動かされた可能性が考えられる。

(3) 玄 室

玄室も約50cm程の厚い土砂が堆積しており、堆積土砂中にも遺物がかなりみられ、攪乱が認められる。玄室内からは、出土須恵器のなかで唯一完形である坏身（P-18）、土師質皿（P-23）、また、玉4点（T-1～4）、金環3点（K-1～3）、刀子3点（I-1, 2, 101）などが出土し、さらに、人骨片（B類）の出土は集中した状態であった。

玄室全体を見てみると、まず、人骨片が玄室前半部東壁付近に出土が集中していることがわかる。また、須恵器皿片（P-21, 29同一個体）、刀子（I-101）がほぼ同一レベルで出土している。金環2点（K-2, 3）は、約40cmの間隔で玄室の前半部から出土している。出土した5点の金環のうち4点が玄室前半部にみられる。玉は、前半部に1点（T-1）、仕切石より50～60cm程前に2点（T-3, 4）が出土している。土器片は、玄室内に散在するといった出土状況である。

さて次に、玄室奥の仕切石から奥壁までの区画をみていきたい。ここからは、玉1点（T-2）、金環1点（K-1）、他に鉄製釘が東部から1点出土している。金環は、敷石と奥壁の間から出土し、玉は、奥壁から50cm、東壁から40cmの位置で敷石直上から出土した。前述もしたが、この出土状況を見ると、1体埋葬されていたと考えるのが妥当であろう。



第4図 遺物出土状況図

◎金環, ●は玉類を示す。土器・骨は図示したが, おもなものについてのみ土器P, 骨はB (羨道出土はSB) で示し, 出土番号を付した。

Ⅲ 出土遺物

金環 金環は、玄室内から5個出土した。保存状態の良くないものもあり、原形・内部などを確認するため、X線撮影を行った。以下、それぞれについて説明する。

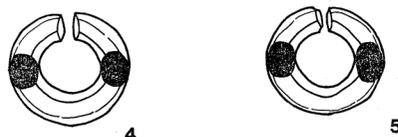
金環 1 径2.8cm、厚さ0.7cm、重さ21.30gである。表面の金箔は、比較的良好な保存状態を保っている。一部、風化が激しいところがあり、内部の芯が露出した状態である。

金環 2 径1.9cm、厚さ0.5cm、重さ2.13gである。保存状態は悪く表面には多量のさびが付着している。下面は一部壊れており、空洞の内部が確認できる。

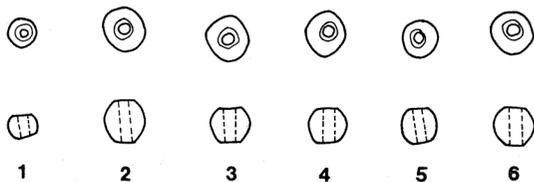
金環 3 径1.8cm、厚さ0.4cm、重さ2.53gである。表面の金箔は、比較的良好に残っている。あまり大きくはないが、X線写真により、内部に空洞はみられない。

金環 4 径3.0cm、厚さ0.9cm、重さ7.44gである。表面は、さびではほぼ全面覆われてはいるが、その隙間からは、耳環に金箔を施していることが確認できる。X線写真により、内部は空洞になっていることがわかる。表面には風化はみられない。

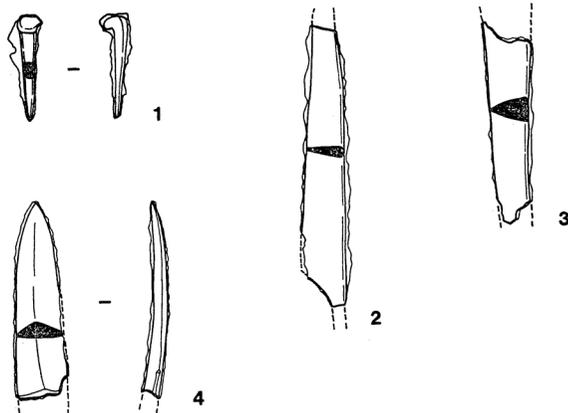
金環 5 径2.9cm、厚さ1.0cm、重さ6.25gである。表面は、かなりさびが付着しているが、金箔が全面にわたっていることが観察できる。X線写真により、内部は空洞であることがわかる。表面には風化はみられない。



金環



玉類



0 5cm

鉄器

第5図 遺物実測図(1)

玉 類 玉は、玄室内より計8個が出土した。大きさは、径0.8cmから径1.2cmまで様々である。8例中2例は、表面に長径0.5cm程の楕円形の斑点をもつものも出土している。残る6例中、径0.8cmの最も小さい玉(No.1)は、色調は赤色でやや扁平なものである。他の玉は、径1.2cm程のほぼ球形に近い濃青色のものである。

鉄製品 玄室内から、刀子2点、金色1点、釘1点が出土した。完存するものは釘だけである。

釘(No.1) 長さ2.8cm、頭部幅6.5mm、厚さ7.5mm、中央部幅3mm、厚さ4mmの完存するものである。玄室奥の仕切られた区画内の東半部から出土した。棺に使用されていた可能性がある。

刀子1(No.2) 刃先端と茎を欠損しており、残存長7.5cmである。刃部中央の幅は1.05cm、背の厚さ2.5mmである。

刀子2(No.3) 残存長5.5cmで、刃先端・関部・茎を欠損している。刃部中央の幅は1.0cm、背は厚く7mmとなる。

鉋(No.4) 反りのある刃部先端部のみの残存で、残存長4.3cmである。

土 器 須恵器・土師器・瓦器・緑釉陶器片など、古墳時代以降の土器も比較的多く出土した。

須恵器(No.1~4) 須恵器片は、蓋坏1点、坏身1点、有蓋高坏の蓋2点、皿1点が出土した。他は、器種不明の小片が少数みられる。完形で出土したのは坏身1点のみである。蓋坏は、基部径14.4cm、器高4cm。口縁部はやや外反気味で、ヘラ削りは表面の¾まで施されている。坏身は、口径10.4cm、器高3.4cm。たちあがりは低く、ヘラ削りによる調整も施されていない。有蓋高坏の蓋2点はいずれも破片である。No.3はつまみが扁平で中心が凹んでいる。No.4はつまみ外縁が欠損している。皿は、口径14.5cm、器高2.0cm。底部は調整されてなく、糸切りの痕跡が明瞭に残っている。

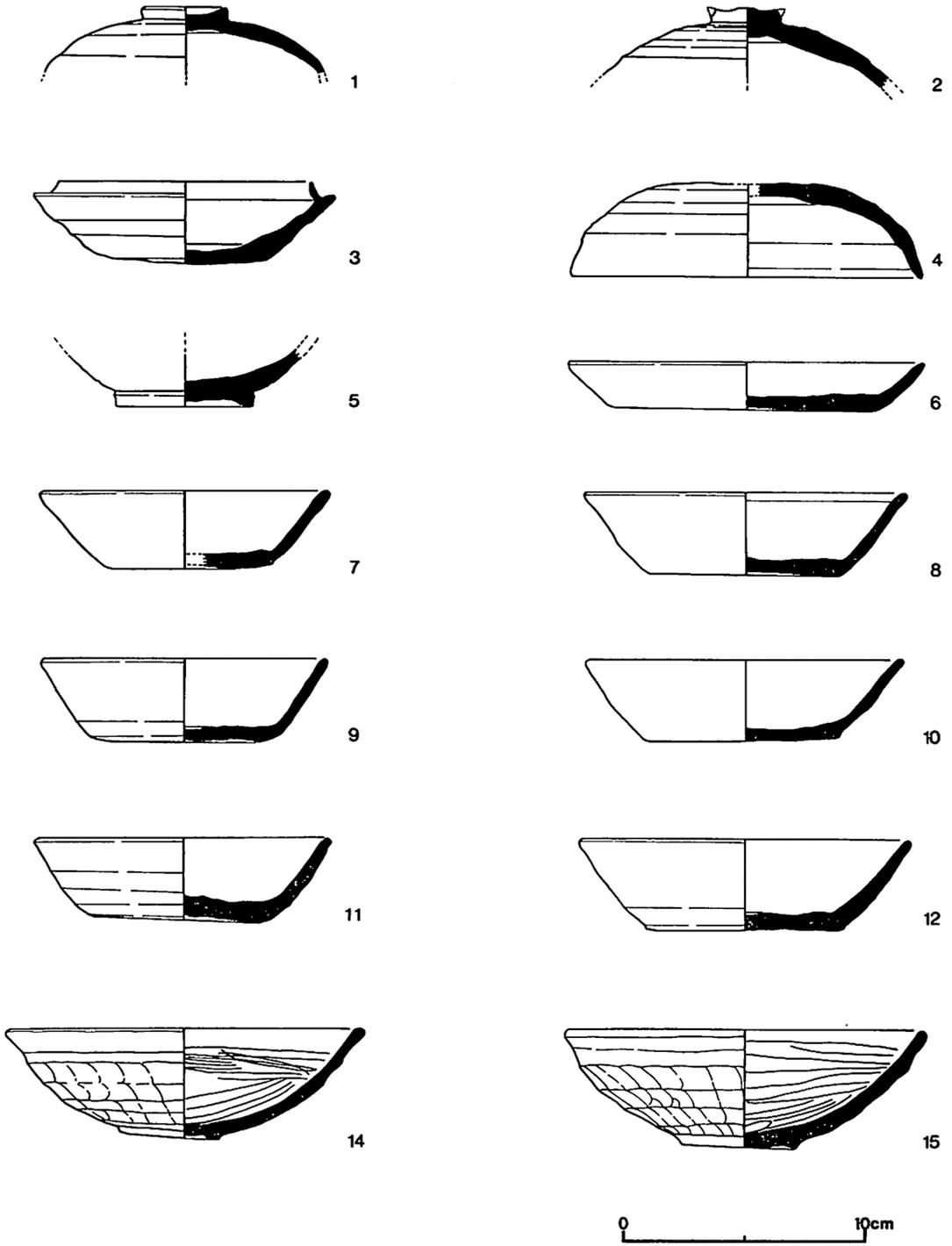
土師器(No.6~12) 土師器は皿が多く出土している。出土土器のなかで、約7割は土師器皿である。口径・器高は、12cm・3.5cm前後のものも多く出土している。底部はあまりていねいには調整されておらず、糸切りの痕が認められる。

瓦 器(No.14・15) 瓦器は、完形の碗2点と破片数点が出土した。No.14は、口径14.4cm、器高4.7cm。底部付け口台は、断面台形をなす。高さは2mmと前者より低い。外面・内面ともヘラミガキなど調整は、前者よりもさらに粗い。また、両碗ともかなり扁平な形である。No.15は、口径14.4cm、器高5cm。底部の付け口台は、断面逆三角形である。外面には指圧痕らしきものがほぼ全面に認められ、調整を意図したと思われる。内面はヘラミガキにより調整されているが、粗い。

緑釉陶器(No.5) 碗の口縁部・底部が各1点出土している。底部付け口台は、高さ0.6cmで断面台形をなす。

以上、出土遺物を概観してきた。土師器皿、瓦器碗、緑釉陶器片など確実に後世に石室内に持ち込まれたものも出土している。須恵器片が少ないことに比べると、比較的出土数は多いと言える。中世に石室内を再利用した可能性が強い。

また、出土した須恵器は6世紀後半におさまるものと考えられる。海原古墳の築造年代は、敷石直下からの金環の出土など敷石が後次の埋葬のために敷かれた可能性があり、いくらかさかのぼるものと思われる。今後の調査・研究の課題である。



第6图 遗物实测图(2)

IV 考 察

美馬町周辺には、段の塚穴と同じ方式で築造された古墳が数多く分布している。これを段ノ塚穴型石室と呼ぶ。つまり、太鼓張りまたは末広がり平面プランに天井石を斜めに持ち送り、いわゆる穹隆式の天井を構成するという特徴を持つ。これは、より高く、より広い空間を得るために執られた構築技法である。この段ノ塚穴型石室は、徳島県内はもちろん日本全国でも他に例をみない。類例としては、結晶片岩という同じ石材を使う和歌山県紀ノ川流域の岩橋千塚などにみられる。より高い空間を得ようという発想は同じだが、天井石を持ち送るという構築技法はどこにもみられない。

段ノ塚穴型石室は、現在 26 基確認されている。東は阿波町の北岡東古墳、西は美馬町の大国魂古墳である。その分布から大きく 4 つのグループに分けることができる。吉野川北岸の東のグループ、西のグループ、南岸の東のグループ、西のグループである。またそれらは 9 つの古墳群に細分できる。

築造時期を考えると、最も古いと考えられるのが大国魂古墳で、最も新しいのが貞光町の江ノ脇古墳である。大国魂古墳の場合、出土品がないので絶対年代は断定できないが、構築技法から最も古いと考えられる。しかも、前述した 4 グループには、それぞれ時期的な変遷がたどれる。



第 7 図 段ノ塚穴型石室分布図（番号は表 1 に同じ）

表 1

段ノ塚穴型

石室一覽表

番号	名称	所在地	全長	玄室			玄門部			羨道部		
				長	幅 最大	高 最高	長	幅	高	長	幅	高
1	大 国 魂 古 墳	美馬郡美馬町城	4.67	2.17	2.22	2.09	1.03	0.84	0.65	1.47	0.97	0.7
2	八 幡 1 号 墳	美馬郡美馬町八幡	4.66	4.00	2.26	2.51						
3	八 幡 2 号 墳	美馬郡美馬町八幡	5.11	2.98	2.29	2.12				1.11	0.93	0.47
4	八 幡 3 号 墳	美馬郡美馬町八幡	3.39	2.34	2.02	2.05						
5	平 野 古 墳	美馬郡美馬町平野	3.57	2.09	1.96	2.07				0.80	1.11	0.80
6	海 原 古 墳	美馬郡美馬町西荒川86	8.4	4.36	2.25	2.8	0.54	0.7	1.4	3.5	1.18	
7	荒 川 古 墳	美馬郡美馬町荒川	8.75	3.45	2.60	2.75	1.40	1.00	0.95	3.90	0.90	
8	小野天神古墳	美馬郡半田町小野天神	4.00		2.33	2.16						
9	西 山 古 墳	美馬郡貞光町西山	2.09	2.01	1.80	1.36						
10	江ノ脇古墳	美馬郡貞光町江ノ脇	5.77	2.17	1.74	2.24	0.55	0.70	1.64	3.05	1.01	1.54
11	真 鍋 塚	美馬郡美馬町宗重49	5.67	3.90	2.30	2.27	0.44	0.83	1.08	1.33	1.33	
12	国史跡 段ノ塚穴,太鼓塚	美馬郡美馬町坊僧373, 374, 363-2	13.10	4.60	3.38	4.25	0.80	1.30	1.75	7.70	2.35	2.45
13	国史跡 段ノ塚穴,棚塚	美馬郡美馬町坊僧368	8.65	4.50	1.95	2.80	0.45	0.85	0.92	3.70	1.20	1.54
14	野村八幡古墳	美馬郡脇町岩倉宮の下4144	8.95	3.85	2.40	3.05	0.60	1.00	1.40	4.50	1.40	
15	国 中 古 墳	美馬郡脇町岩倉國中2965の2	2.44	2.44	1.86	1.87						
16	三 島 1 号 墳	美馬郡穴吹町三島 (1号)	5.25	2.30	2.01	1.90	0.25	0.82	1.13	2.70	1.10	1.40
17	三 島 2 号 墳	美馬郡穴吹町三島 (2号)	5.60	1.95	2.02	1.86	0.65	0.73	0.93	3.00	0.80	1.05
18	三 島 3 号 墳	美馬郡穴吹町三島	5.0	2.20	2.45	2.25						
19	三 谷 古 墳	美馬郡穴吹町三谷	4.62	2.02	2.01	2.34	1.08	0.67	1.18	1.52	0.84	
20	戎 古 墳	美馬郡穴吹町字戎55	4.03	3.26	2.36	1.82	0.36	0.41	1.15			
21	尾 山 古 墳	美馬郡穴吹町字尾山	4.06	3.37	2.40							
22	北 原 古 墳	美馬郡脇町江原拜原466	6.94	3.94	1.70	2.40	0.20	0.94	0.95	2.80	1.30	1.20
23	中 拜 原 古 墳	美馬郡脇町江原拜原1081	7.11	3.60	2.38	2.96	0.25	0.81	0.89	2.80	1.02	
24	東 拜 原 古 墳	美馬郡脇町江原拜原2473の2	5.40	3.64	2.52	2.71	0.26	0.82	0.95	0.50	1.02	1.07
25	県史跡 北岡東古墳	阿波郡阿波町字北岡115の2	5.26	3.10	2.05	2.24				2.16	0.80	1.17
26	県史跡 北岡西古墳	阿波郡阿波町字北岡74の2	5.83	3.85	2.10	3.20	0.40	1.10		1.58	1.34	

奥 壁	石 棚	玄室天井 石の構成 (奥壁側×最高部 ×玄門側)	側壁の石材	床 面
砂岩の割石積み	奥厚 行き 30 cm	2×1×2	下半…砂岩の栗石 上半…片岩の割石	敷石か?
3枚の片岩を横に並列 その上に片岩の割石積み	奥厚 行き 80 cm	3×1×3	片岩の割石	敷石か?
砂岩の積み石, その上に 片岩の割石積み	なし	2×1×2	下半…砂岩の栗石 上半…片岩も使用	不 明
砂岩の割石積み, その上に 片岩の割石積み	なし	2×1×2	下半…砂岩の割石 上半…片岩も使用	不 明
砂岩の割石積み	なし	2×1×2	砂岩の割石積み	不 明
一枚石	奥厚 行き 85 cm	2×1×2	砂岩の栗石主体 片岩も使用	敷 石
一枚石	奥厚 行き 78 cm	3×1×4	片岩の割石	敷石か?
不 明	あ 詳 細 不 明	3×1×2	片岩の割石	不 明
片岩の割石積み	なし	2×1×2	片岩の割石	不 明
一枚石	なし	1×1×1	片岩の割石	敷石か?
一枚石	なし	3×1×2	片岩の割石	不 明
片岩の割石積み	なし	3×1×3	片岩の割石	敷石か?
一枚石	奥厚 行き 80 cm	2×1×2	片岩の割石	敷石か?
一枚石	奥厚 行き 80 cm	2×1×2	砂岩の栗石	敷石か?
砂岩の栗石積み	なし	3×1×1	砂岩の栗石	不 明
片岩の割石積み	なし	2×1×2	片岩の割石	敷石か?
片岩の割石積み	なし	3×1×2	片岩の割石	不 明
一枚石	なし	3×1×3	片岩の割石	敷石か?
一枚石	なし	2×1×2	片岩の割石	不 明
片岩の割石積み	なし	1×2	片岩の割石	敷石か?
片岩の割石積み	なし	不 明	片岩の割石	不 明
一枚石	なし	3×1×2	砂岩の栗石	敷石か?
一枚石をおき, その上に 4段の積み石	なし	3×1×3	基盤に片岩割石 あとは砂岩栗石	不 明
砂岩の積み石	なし	2×1×4	砂岩の栗石	不 明
片岩割石と砂岩積み石	なし	2×1×3	片岩の割石	敷石か?
一枚石	なし	3×1×2	砂岩の栗石	不 明

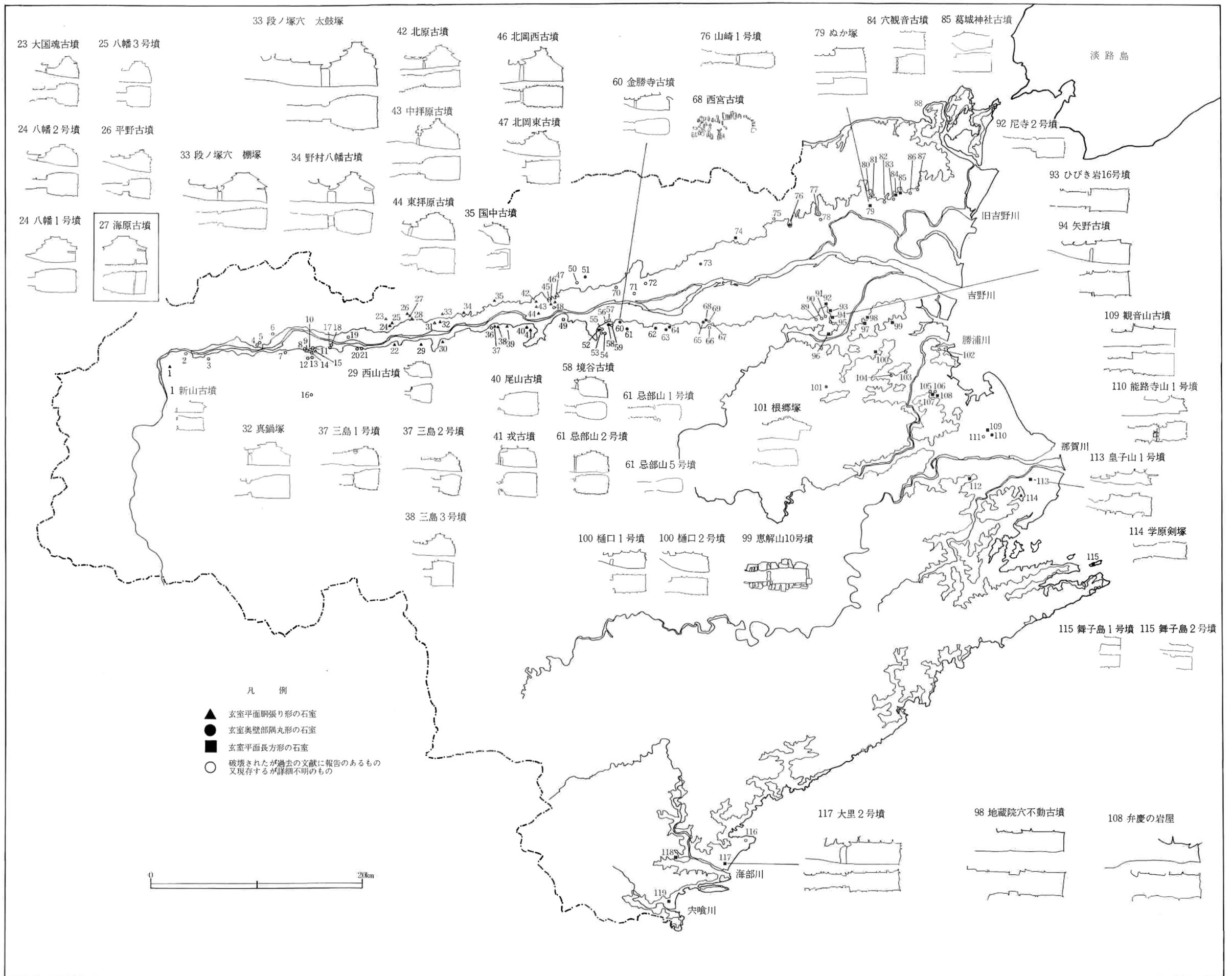
徳島県内では、横穴式石室の分類を進めていくと（第8図参照）、律令期の各郡単位にまとめられる。これは石材の相違もあるが、墓制に対する考え方の差が出ていると考えられる。つまり、墓は氏族集団によってその差がみられるものであり、墓の差違は、氏族集団の差違とも考えられる。また、氏族間の結びつきや大和朝廷との関係の差によっても異なると考えられる。

古くから、この横穴式石室の違いから阿波三国説が唱えられてきた。つまり、律令にみられる粟・長の国以外に美馬郡周辺に一つの国があったのではないかという考え方である。段ノ塚穴はまさに国王の墓にふさわしく、その壮大さからも国の存在を考えざるを得ないというのである。

残念なことに、美馬町周辺、ひいては美馬郡周辺のことを古代の記録にほとんど登場しない。登場しないことに意味があるのかもしれないが、東に隣接する麻植郡とは大きな差がある。麻植郡は阿波忌部氏の本拠地ということもあって大きく登場する。横穴式石室では、規模、築造数などから美馬郡の方がはるかに凌駕する。が、麻植郡の石室はちょうど吉野川下流域の石室と段ノ塚穴石室の中間的形態を示している。麻植郡の石室と兄弟関係といってもいいほどである。

段ノ塚穴型石室は、大和朝廷とはあまり関係のない一つの氏族集団の墓と捉らえるべきであろう。しかもかなりの強大な勢力を誇り、そして徳島県最古の寺院郡里廃寺を現出させたのである。

-
- 註(1) 岡山真知子 「段ノ塚穴型石室の研究」 徳島県博物館学術奨励研究提出論文 1975年
大塚 一志 「徳島県における横穴式石室の研究」 奈良大学卒業論文 1988年3月
註(2) 石丸 洋 「徳島県美馬郡願勝寺1号墳」『古代学研究56号』 1969年
註(3) 徳島県教育委員会『徳島県文化財調査概報昭和54年度』 1981年



第8図 徳島県における横穴式石室分布図



西からみた海原古墳墳丘



調査前の海原古墳
手前は厚い土砂の堆積した横穴式石室羨道



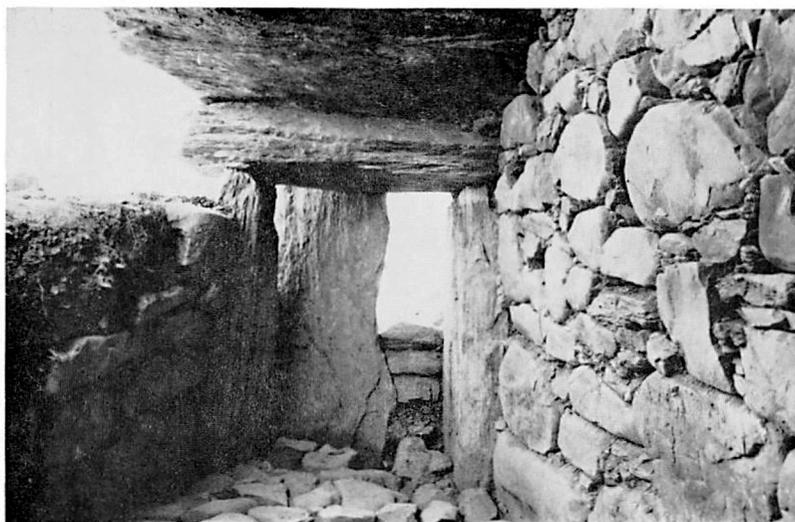
横穴式石室の保存状態

東壁の大半が崩壊しているにもかかわらず、天井石は1枚も落石していない。



玄室敷石・仕切石の検出状況

向かって右は玄室奥



玄室奥からみた玄門部の構造
扉石がおかれている。



持ち送られた天井構造をみる
左右の立石の上に1枚の天井石を構架し、そこから最高部まで2枚の天井石を持ち送る。

図版 4

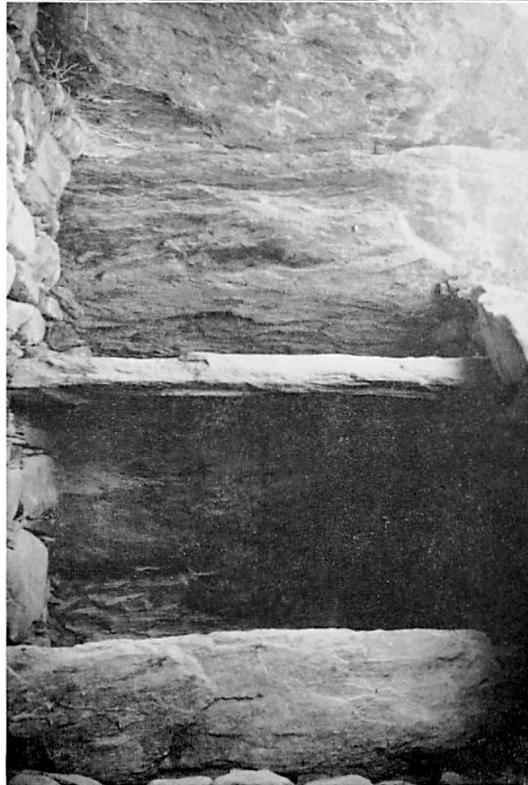
羨道発掘状況

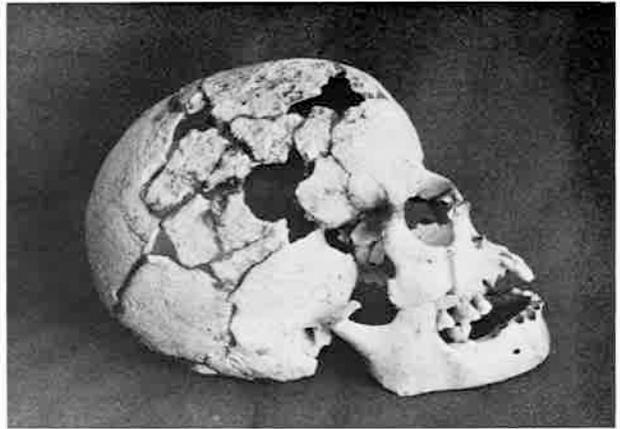
中央の礫は崩壊した東壁の石材と思われる。



玄室奥の構築状況

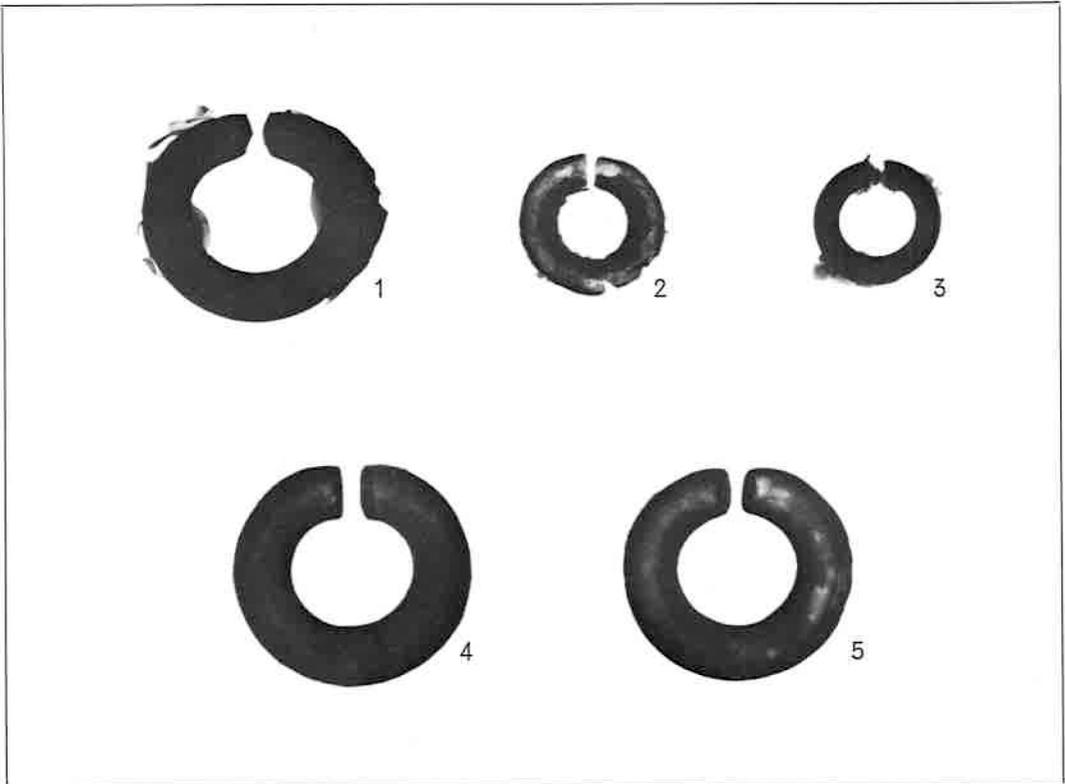
下から敷石、仕切石、奥壁、石棚、天井石2枚。





▲ 羨道出土人骨

金環 X 線写真 ▼



徳島県博物館紀要

第19集

昭和63年3月25日印刷

昭和63年3月31日発行

編集・発行 徳島県博物館
徳島市新町橋2-20

印刷所 原田印刷出版株式会社
徳島市西大工町4丁目5

